

猿野遺跡・萩崎第2遺跡

市道下北方通線改良工事に伴う発掘調査報告書

1996

宮崎市教育委員会

序

太陽と緑豊かな自然環境に恵まれた宮崎市には、悠久の歴史を証す文化遺産もまた、数多く遺存しております。

近年の都市開発事業等に伴う発掘調査により、数多くの埋蔵文化財が明らかになってまいりました。これらの調査においては、原始、古代からの大地に刻み込まれた歴史の一端を解き明かす貴重な資料を提供するとともに、数多くの遺跡が消え去ってゆきました。現在、これらの文化遺産の保護と活用は、全国的に重要な課題となっております。

宮崎市教育委員会では市道下北方通線改良工事に伴い、平成7年度に猿野遺跡、萩崎第2遺跡の発掘調査を行いました。発掘の成果につきましては竪穴式住居11軒が検出され、それに伴う土器等が大量に出土いたしました。本書はこれら2遺跡の発掘調査報告書であります。本書が今後の調査研究の一助となり、また数多くの人々の目に触れ、埋蔵文化財に理解と関心をもっていただけたら幸いと思っております。

最後になりましたが、発掘調査、本書刊行にあたり、色々と御配慮、御協力いただきました関係各位をはじめ、残暑の厳しいなか、発掘作業に従事してくださった作業員の方々に対し厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

宮崎市教育委員会

教育長 稲 倉 宗 知

例　　言

1. 本書は市道下北方通線改良工事にかかる、猿野遺跡、萩崎第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成7年8月18日から10月23日までの期間実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物及び、調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。

4. 調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会		
調査総括	文化振興課	文化財係長	井手上 仁悟
調査事務		主　事	岩城 勝志
調査員		主　事	中山 豪
		主　事	鳥枝 誠
		主　事補	時任 直也
補助員		嘱　託	椎 由美子
		嘱　託	松永 光雄
		嘱　託	溝淵 利子
		嘱　託	久富 なをみ

5. 本書の執筆は鳥枝が行った。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は中山・鳥枝・時任・椎・松永・岩城が分担して行った。
7. 写真撮影は、中山・鳥枝が行った。
8. 本書の編集は鳥枝・久富が行った。

本文目次

I	はじめに.....	1
	第1節 発掘調査に至る経緯.....	1
	第2節 遺跡の立地と歴史的環境.....	1
II	猿野遺跡の調査.....	5
	第1節 調査区の設定と概要.....	5
	第2節 層序.....	5
	第3節 古墳時代の遺構と遺物.....	7
	第4節 その他の時代の遺構と遺物.....	41
III	萩崎第2遺跡の調査.....	44
	第1節 調査の概要と層序.....	44
	第2節 遺構と遺物.....	44
IV	まとめ.....	45

挿図目次

第1図	宮崎市地図.....	3
第2図	遺跡周辺地図.....	4
第3図	猿野遺跡土層図.....	5
第4図	猿野遺跡A区平面図.....	6
第5図	猿野遺跡B区平面図.....	6
第6図	1号住居遺物出土状況図.....	7
第7図	1号住居出土遺物実測図1.....	9
第8図	1号住居出土遺物実測図2.....	10
第9図	2号住居出土遺物実測図1.....	12
第10図	2号住居出土遺物実測図2.....	13
第11図	2号住居遺物出土状況図.....	14
第12図	3号住居上面及び4号住居遺物出土状況図.....	14
第13図	3号住居遺物出土状況図.....	16
第14図	3号住居出土遺物実測図1.....	18
第15図	3号住居出土遺物実測図2.....	19

第16図	3号住居出土遺物実測図3	20
第17図	3号住居出土遺物実測図4	21
第18図	4号住居平面図	21
第19図	4号住居出土遺物実測図	23
第20図	5号住居遺物出土状況図	24
第21図	5号住居出土遺物実測図	24
第22図	6号住居遺物出土状況図	26
第23図	6号住居出土遺物実測図	27
第24図	7号住居遺物出土状況図	28
第25図	7号住居出土遺物実測図	29
第26図	8号住居遺物出土状況図	31
第27図	8号住居出土遺物実測図	32
第28図	9号住居遺物出土状況図	34
第29図	9号住居出土遺物実測図1	35
第30図	9号住居出土遺物実測図2	36
第31図	10号住居遺物出土状況図	38
第32図	10号住居出土遺物実測図	38
第33図	11号住居出土遺物実測図	38
第34図	遺構外出土の遺物実測図	40
第35図	溝状遺構1出土遺物実測図	40
第36図	溝状遺構3出土遺物実測図	43
第37図	その他の時代の遺物実測図	43
第38図	萩崎第2遺跡出土遺物実測図	44

図 版 目 次

図版 1	猿野遺跡A-1区全景（西から）	49
図版 2	猿野遺跡B区全景（東から）	49
図版 3	猿野遺跡1号竪穴住居検出状況（北から）	49
図版 4	猿野遺跡2号竪穴住居検出状況（東から）	49
図版 5	猿野遺跡2号竪穴住居土器出土状況	50
図版 6	猿野遺跡2号竪穴住居土器出土状況	50
図版 7	猿野遺跡3号竪穴住居検出状況－上面（東から）	50
図版 8	猿野遺跡3号竪穴住居土器出土状況－上面	50
図版 9	猿野遺跡3号竪穴住居土器出土状況－上面	51

図版10	猿野遺跡3号堅穴住居検出状況（西から）	51
図版11	猿野遺跡3号堅穴住居土器出土状況	51
図版12	猿野遺跡4号堅穴住居検出状況（北から）	51
図版13	猿野遺跡4号堅穴住居石組検出状況	52
図版14	猿野遺跡5号堅穴住居検出状況（東から）	52
図版15	猿野遺跡6号堅穴住居土器出土状況	52
図版16	猿野遺跡7号堅穴住居、溝状遺構1検出状況（東から）	52
図版17	猿野遺跡7号堅穴住居土器出土状況	53
図版18	猿野遺跡8号堅穴住居土器出土状況	53
図版19	猿野遺跡8号堅穴住居、溝状遺構1検出状況（北から）	53
図版20	猿野遺跡9号堅穴住居検出状況（北から）	53
図版21	猿野遺跡9号堅穴住居土器出土状況	54
図版22	猿野遺跡9号堅穴住居（西から）	54
図版23	萩崎第2遺跡5トレンチ溝状遺構検出状況（東から）	54
図版24	萩崎第2遺跡5トレンチ土器出土状況	54
図版25	猿野遺跡出土遺物1	55
図版26	猿野遺跡出土遺物2	56
図版27	猿野遺跡出土遺物3	57
図版28	猿野遺跡出土遺物4	58
図版29	猿野遺跡出土遺物5	59
図版30	猿野遺跡出土遺物6	60
図版31	猿野遺跡出土遺物7	61
図版32	萩崎第2遺跡出土遺物	61

I はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成5年度、宮崎市大島町から宮崎市阿波岐原町に至る（2、3工区）市道下北方通線改良工事に伴い、道路敷設工事区内での文化財の有無照会が、宮崎市建設部土木課より文化振興課に提出された。そのルート上は周知の遺跡である猿野、萩崎第2遺跡に隣接し、以前より数多くの遺物の発見が報告されており、遺跡の存在が確実視されている地点であった。

これをうけて、文化振興課は平成6年9月1日、道路ルート上にあたる砂丘上の4地点について試掘調査を実施した。その結果、2工区内の阿波岐原町猿野及び、3工区内の波島1丁目、大島町萩崎にまたがる2地点については土器片が道路予定地内及び、その周辺に散在しており、発掘調査が必要と回答した。

その後、土木課との協議の結果、調査は平成7年度に行うこととし、調査範囲は道路幅内で大島町側を市道吉村通線より西側の砂丘上とし、阿波岐原町側は県道鳥之内～の宮線以西の砂丘上とした。

発掘調査は平成7年8月18日より10月23日にかけて行われた。

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

猿野遺跡は東流して日向灘へ注ぐ大淀川の河口部左岸から、北へ約4.7km、東の海岸線より約1.4kmの標高約5mの砂丘上に立地する。萩崎第2遺跡は猿野遺跡の西方約900mの標高約10mの砂丘上に立地している。

大淀川左岸の平野部には海岸線に平行して4本の砂丘列が観察される。この砂丘列は大淀川の流路の変化によって形成されたものであり、形成された順に内陸から第1砂丘（榎一大島砂丘）、第2砂丘（江田原一山崎砂丘）、第3砂丘（防潮林一五厘橋砂丘）、第4砂丘（住吉浜一ヶ葉浜）と呼称されている。第1～第2砂丘、第2～第3砂丘の間は現在、南北に細長い水田地帯となっているが、この地は砂丘形成当時は入り江であったと推定される。その後、堆積作用等により徐々に陸地化してゆき、低湿地となり、湿地を利用した水稻耕作が始まった。その後、耕地化が進み、近現代の土地改良事業等を経て、現在見られるような景観になったものと思われる。なお、猿野遺跡は第2砂丘上、萩崎第2遺跡は第1砂丘上に立地している。

猿野、萩崎第2遺跡の周辺には数多くの遺跡が確認されており、そのうちのいくつかは発掘調査が行われている。猿野遺跡の北方約650mの第2砂丘上には石神遺跡が所在する。石神遺跡は昭和45、46年に宮崎市教育委員会、昭和59年に宮崎県教育委員会により調査が実施され、壇棺墓、甕棺墓、住居址等が検出され、弥生時代中期～後期初頭の土器、石器、軽石製品、土製品が出土している。^(註1)

第1砂丘上には萩崎第2遺跡の約1.7km南に榎遺跡が所在する。榎遺跡は現在の榎中学校の

敷地内で、第1砂丘の根幹部の位置にあたる。櫛遺跡は昭和26、27年に小児用甕棺が発見され、昭和31年から3次にわたり発掘調査が行われている。調査により、積石墓9基及び甕棺墓3基が検出され、これらの墓に伴う弥生時代前期の土器が出土した。^(注2)

櫛遺跡の南には前方後円墳である櫛1号墳が所在する。また、櫛遺跡の北方約300mには昭和62年に調査された江田原第1遺跡が位置する。^(注3) 江田原第1遺跡からは竪穴状造構、土壙、溝状造構が検出されており、古墳時代終末から奈良、平安時代にかけての土器が出土している。江田原第1遺跡の西方約300mの低地には昭和60年に調査され、水田址と推測される造構が検出された浮ノ城遺跡が所在する。^(注4) また、萩崎第2遺跡と猿野遺跡の間にある、第1砂丘上の現在、宮崎東小学校の敷地内からは昭和30年に甕棺が2個出土している。^(注5)

猿野遺跡の北方約2.5kmには式内社である江田神社が鎮座しており、遺跡の周辺は『延喜式』に記載されている日向の十六駅のうち江田（石田）駅に推定されている地であり、今後の調査で、駅家、郡衛、官道等の官衛遺跡の検出も期待できる。

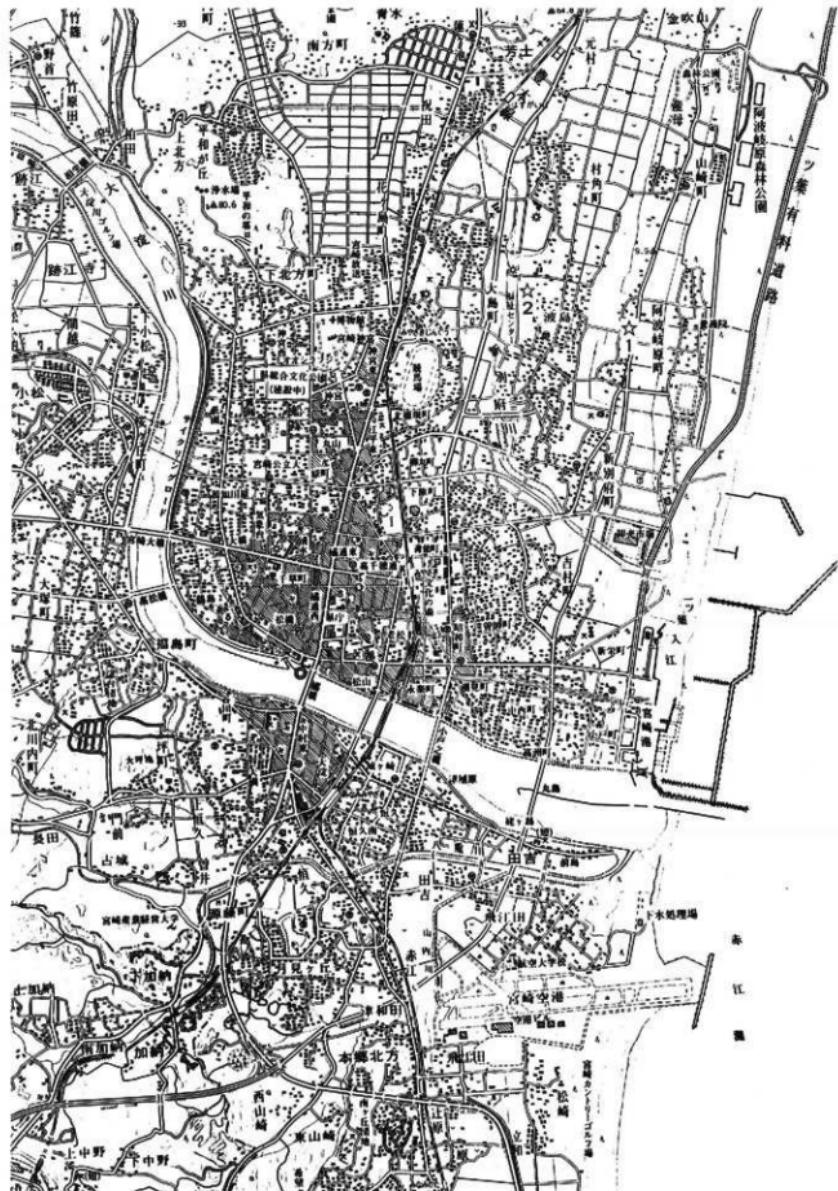
(注1) 『石神遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第1集 宮崎市教育委員会 1973

(注2) 「櫛遺跡」『宮崎県史』資料編 考古2 宮崎県 1989

(注3) 『柿木原地下式横穴墓56-1号・江田原第1遺跡』 宮崎市教育委員会 1989

(注4) 『吉村第二土地区画整理事業に伴なう埋蔵文化財調査報告書 浮ノ城遺跡』 宮崎市教育委員会 1986

(注5) (注3) 文献



1.猿野道路 2.萩崎第2遺跡
第1図 宮崎市地図(1/50,000)



- 1.猪野遺跡 2.萩崎第2遺跡 3.石神遺跡 4.大島火切塚遺跡 5.江田原第1遺跡 6.浮ノ城遺跡 7.櫛遺跡 8.櫛1号墳

第2図 遺跡周辺地図 (1/10,000)

II　猿野遺跡の調査

第1節　調査区の設定と概要

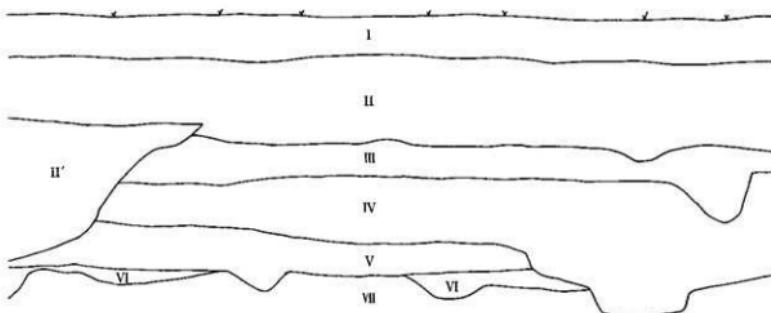
発掘調査は道路幅の範囲内を対象とし、調査に際しては諸般の事情により、調査区を2分割し、東側をA区、西側をB区とした。調査区内は家屋が建っていた関係上、部分的に搅乱が著しく、深いところでは現地表下1m以上の深さまで搅乱が達していた。

調査の結果、A区からは竪穴住居址が2軒検出され、東端の1号住居址の北側には時期の特定出来ない土坑群が検出された。B区からは9軒の住居址及び、3条の溝状遺構が切りあつた状態で検出された。住居址はいずれも方形プランで、出土土器から古墳時代に比定される。

出土遺物の大半は竪穴住居に伴う土師器で、数量はかなりのものである。他に弥生土器、磨石、砥石、須恵器、古代～中世にかけての土師器、土錐が出土した。他に特徴的なものとして、おびただしい量の軽石が出土し、なかには穿孔を施したもの、船底状に窪ませたもの、面取りをおこなったものなども見受けられる。また、鉄鎌、土製勾玉が1点出土した。

第2節　層序

第3図はB区西壁南一北セクション図である。基本的な層序は以下に示す通りである。



第I層—灰褐色砂質土層——現表土である。

第3図 猿野遺跡土層図

第II層—明黄褐色砂層——旧耕作土である。

第II'層—褐色砂層——溝の埋土である。

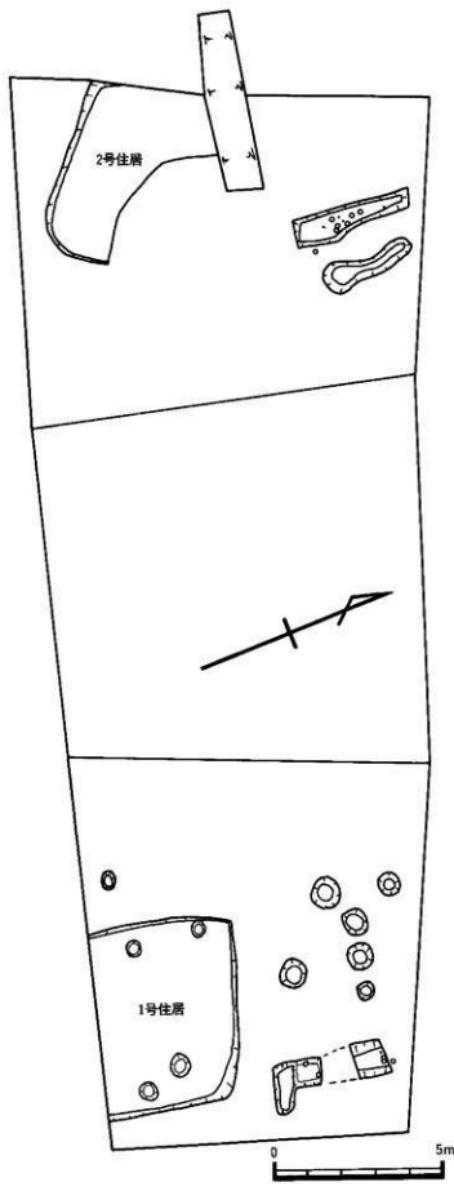
第III層—黒褐色砂層——II層とIV層の漸移層である。

第IV層—黒灰色砂層——遺物包含層。

第V層—黒色砂層——遺物包含層。

第VI層—暗褐色砂層——V層とVII層の漸移層である。

第VII層—黄灰色砂層——基盤層である。



第4図 猿野遺跡A区平面図



第5図 猿野B区平面図

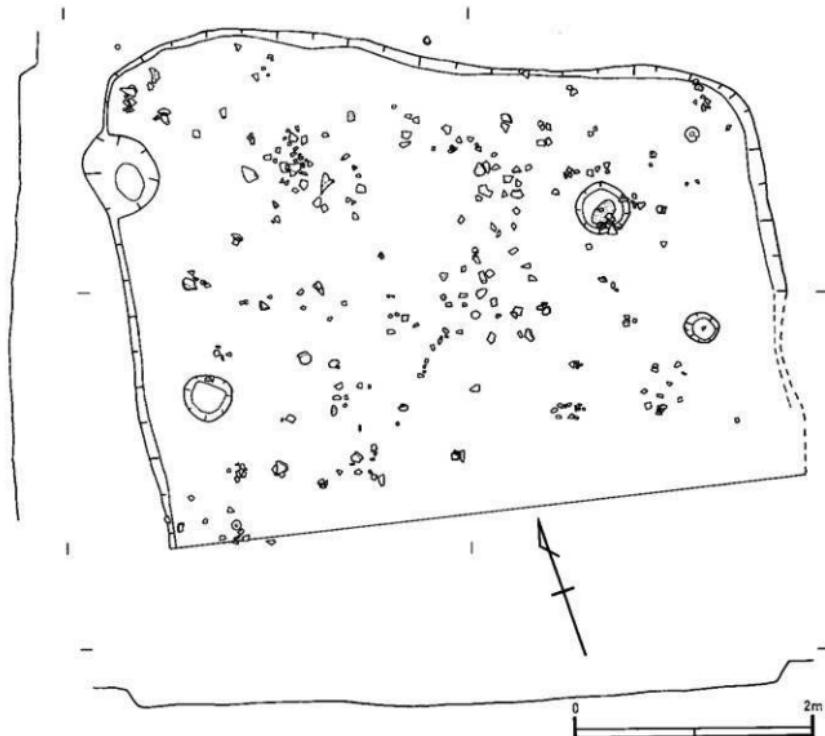
- 土器
- △ 瓦
- 軽石

第3節 古墳時代の遺構及び遺物

1号竪穴住居（第6図）

A区の東端に位置し、南側は調査区外にかかる。東西5.5m、南北3.75m以上、検出面からの壁高約18cmで、中央部は浅く窪む。住居址の東西にあるピットは柱穴と思われるが、ともに浅い。北東のピットは径約45cm、床面からの深さ16cmを測り、底からは長径24cmの軽石、高坏の脚部(18)が出土した。

住居址からは土器器の甕、壺、小型丸底壺、高坏、鉢、ミニチュア土器が出土した。遺物は住居址のほぼ全面より出土しているが、床面より、若干、浮いた状態で出土したものが多い。



第6図 1号住居遺物出土状況図

出土遺物（第7、8図）

1～5は壺である。

1は胴が丸く張り、口縁部は内彎気味に外傾し、口縁端部は内面をナデで尖らせ気味に整形している。頸部はナデにより、浅く窪む。調整は口縁部外面がヨコナデ、胴部外面は刷毛目調整で、肩部はヨコナデで仕上げる。内面は頸部までケズリを施す。胎土にごく少量の砂粒を含み、焼成は良好である。口径17.3cm。

2、3はやや長く上方に立ち上がる口縁部をもつもので、ともに端部は丸くおさめる。2は胴が丸く張り、調整は口縁部外面がヨコナデ、胴部には刷毛目を施し、肩部はヨコナデで仕上げる。内面はナデ調整である。3は2に比べ、胴の張りが小さく、外面は頸部まで刷毛目を施し、内面はナデである。口縁部は外面がヨコナデ、内面は刷毛目を施す。

4、5は頸部が強く屈曲するもので、4は口縁端部に外に面を作り、5は丸みをもった面を作る。外面調整は口縁部がヨコナデ、胴部は刷毛目調整で、肩部はヨコナデで仕上げる。内面は風化の為、不明瞭であるが、斜め下方から斜め上方に向けてのケズリを施しているものと思われる。4の口径12.6cm。

6～10は小型丸底壺である。

6～8は球形に近い胴部から、口縁部が外傾するもので、口径と胴部径がほぼ等しい。6は完形品で口径8.8cm、器高8.0cmを測る。口縁端部は丸くおさめ、内外面ともにナデ調整である。7は口縁端部をやや尖らせ気味に整形し、8は口縁端部を丸くおさめる。ともに外面が刷毛目調整で、内面はナデ調整である。7の外面は刷毛目調整後、ナデで仕上げている。

9は胴部が扁球形で、口縁部は長く、わずかに内彎しながら外傾し、端部は尖らせ気味に整形している。内外面ともにナデ調整。

10は胴の張りが小さく、口縁部の外傾は強く、口縁端部は丸い。内外面ともにナデ調整である。

11～20は高壺である。

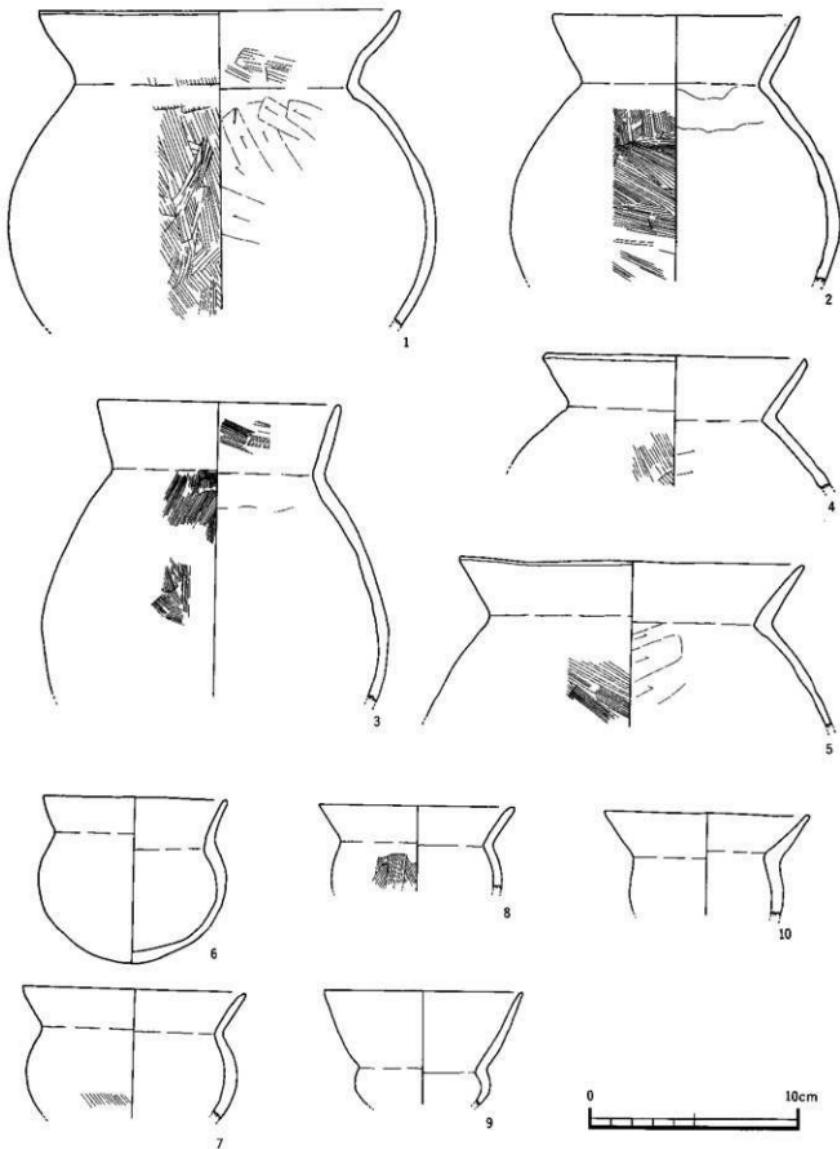
11、12は壺部で壺底部付近に稜をもち、直線的に外上方へ伸びる口縁部をもつ。ともに端部は丸くおさめ、調整は内外面ともにナデである。

13～20は脚部で、13～15、17、18は下方に向かって、直線的に開き、尻曲して、裾部が広がるものである。13はやや中膨らみとなり、開きが小さく、15は脚柱部と裾部の境の屈曲がゆるやかである。16、19は下方に直線的に開く脚柱部で、19は開きが小さい。20は裾部である。

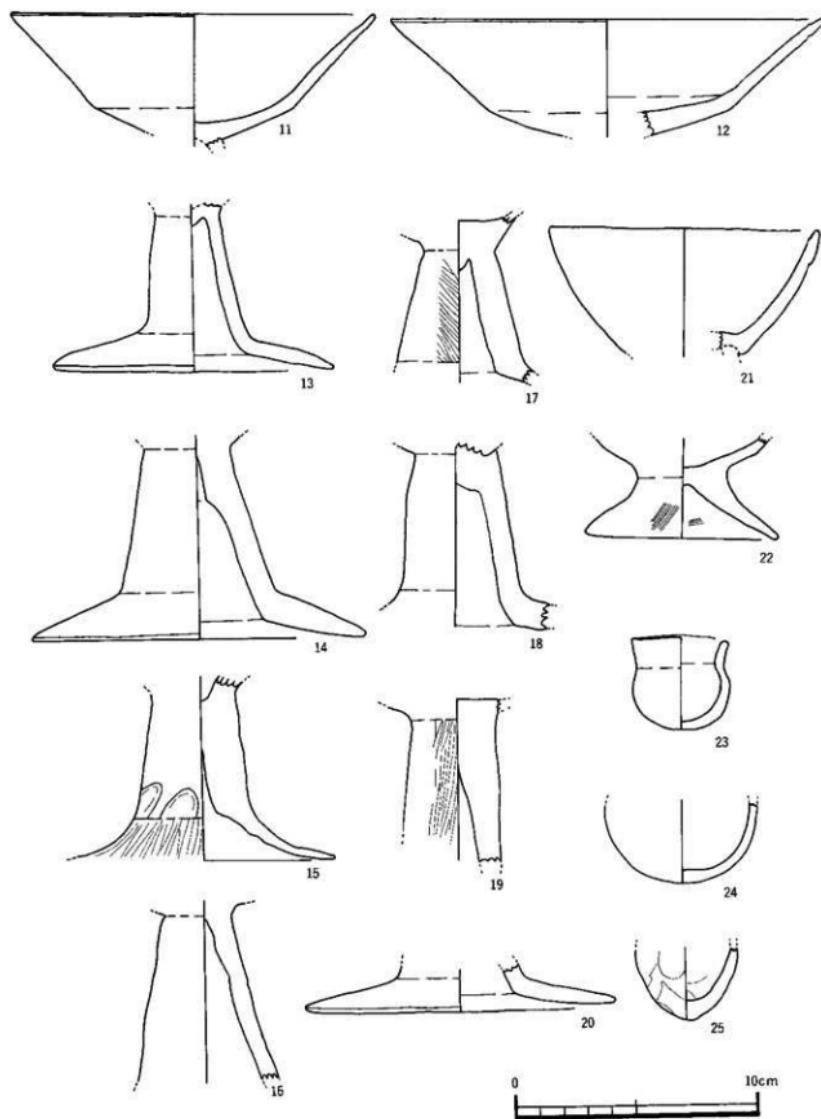
調整は13、14、16、18、20が内外面ともにナデ調整。17、19は脚柱部外面に刷毛目を施す。15は裾部外面に刷毛目、脚柱部との境に指オサエを施す。

21、22は脚台付きの鉢である。21は体部がやや内彎しながら立ち上がり、口縁端部は尖る。22は脚台部で、端部は丸くおさめる。調整は21が内外面ともナデ、22は内外面ともに刷毛目調整の後、ナデで仕上げている。

23～25はミニチュア土器である。23は完形品で壺形を呈し、口径、器高ともに3.9cm、調整はナデ。24は丸底の土器で器壁は薄く、内外面ともにナデ調整である。25は尖底状の底部で、手捏ね土器である。内外面ともに指オサエ痕を残す。



第7図 1号住居出土遺物実測図1



第8図 1号住居出土遺物実測図2

2号竪穴住居（第11図）

A区西端に位置し、西側が調査区外にかかり、北側から東側にかけては攪乱が深く、住居址の床面まで破壊されている。東西5.5m以上、南北3.95m以上、検出面から床面までの深さ約19cmを測る。住居址は方形のプランを呈し、隅は丸みをおびる。柱穴等は検出できなかった。

住居址からは土師器の甕、壺、小型丸底壺、高坏、鉢、ミニチュア土器が出土した。遺物の大半は床面直上で出土したが、住居址南西部においては床面及び、床面より浮いた位置の2面で、遺物の出土が認められる。

出土遺物（第9、10図）

26～30は甕である。

いずれも胴が丸く張り、頸部の屈曲は緩やかで、口縁部が、やや上方に外傾するものである。口縁端部は丸くおさめる。26は最大径を口縁部にもち、27は胴部が卵形を呈する。29は平底で口縁部が他のものに比べ、より上方に立ち上がる。30は口縁部が短く、端部は肥厚し、やや外反する。

器面調整は26、27、29が内外面ナデ調整。28が内外面刷毛目調整。30は外面刷毛目の後、ナデで仕上げ、内面は刷毛目調整である。26の口径は23.1cm、器高25.4cm。以下、27が21.1cm（推定）、27.2cm。28は19.8cm、24.5cm。29が21.3cm、23.6cmを測る。

31～33は壺である。

31、32は口縁部が外上方へ向かって、直立気味に伸び、端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整で橙褐色を呈し、焼成は良好である。33は壺の底部である。

34は小型丸底壺である。胴部は、やや扁球形で、内外面ともにナデ調整で仕上げている。

35～40は高坏である。

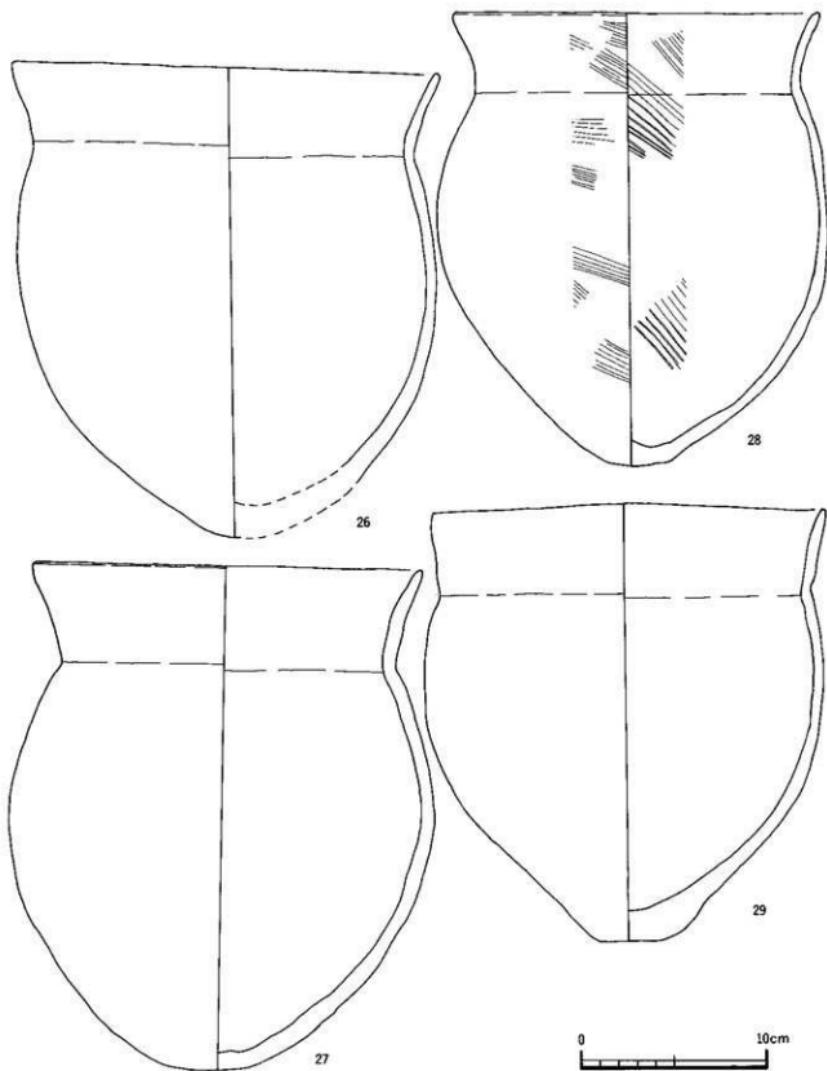
35は推定口径19.0cm、器高15.2cmを測る。坏部は坏底部付近に稜を持ち、口縁部は外上方に直線的に伸び、端部は丸くおさめる。脚部は下方に広がりながら屈曲し、裾部が大きく開き、端部は丸くおさめる。坏部の一部が欠損している。36は坏部で坏底部付近に強い稜をもち、端部は丸くおさめる。35、36ともに内外面ナデ調整で、坏部と脚部との接合は円盤充填法でおこなっている。36の口径20.9cm。

37～40は脚部である。37～39は、いずれも下方に直線的に開き、屈曲して裾部が広がるもので、37は裾端部に面を作る。38の脚柱部は太くて短い。調整は37、38が内外面ともにナデで、38は内面に指サエ痕を残す。39は外面が刷毛目調整後、ナデで仕上げている。40は脚柱部で内外面ともにナデ調整である。

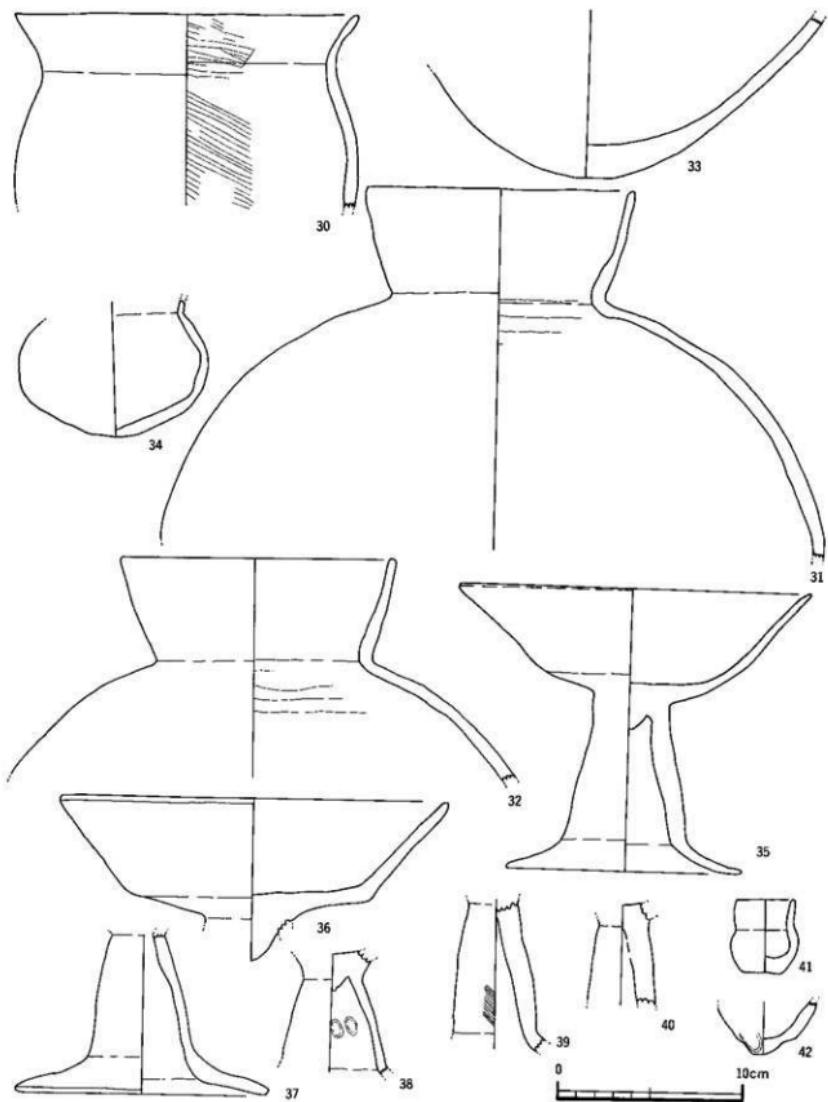
41、42はミニチュア土器である。

41は完形品で口径3.1cm、器高4.0cmを測る。手捏ね土器で頸部が太く、口縁部が直角する壺形を呈している。器面調整は内外面とも指サエ後、ナデ調整。42は胴部～底部片で、指サエにより、底部が尖底状になっている。

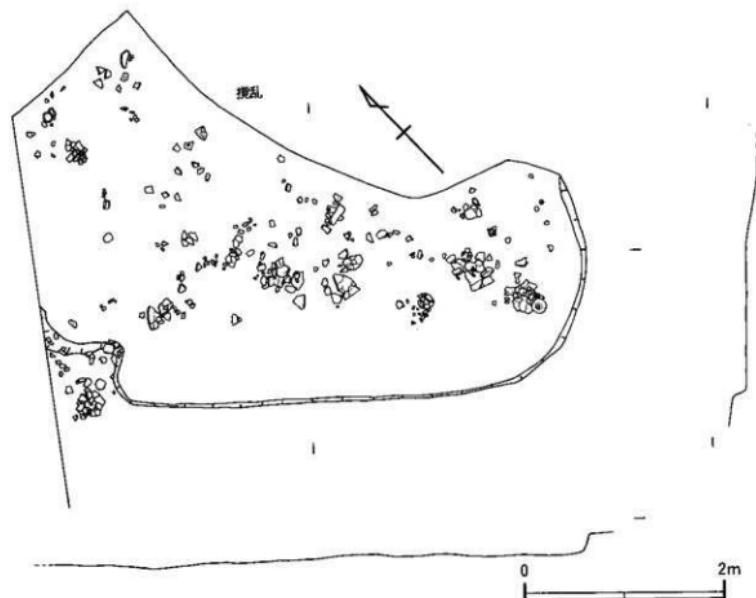
26～30、34～40は床面直上、31～33、41、42は床面より浮いた位置で出土した。



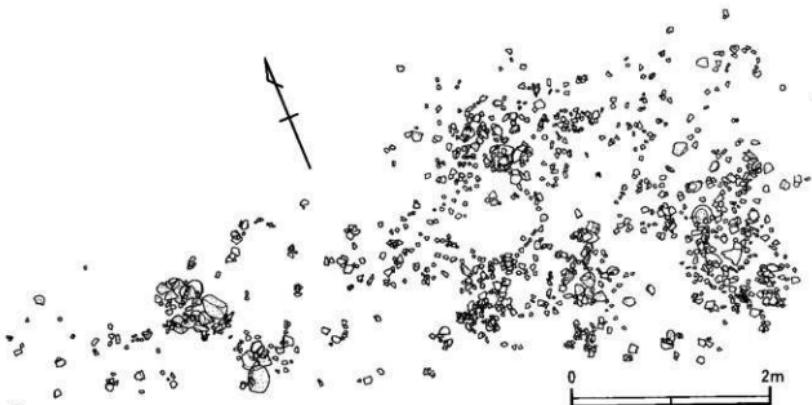
第9図 2号住居出土遺物実測図1



第10図 2号住居出土遺物実測図2



第11図 2号住居遺物出土状況図



第12図 3号住居上面及4号住居遺物出土状況図

3号竪穴住居（第12、13図）

B区中央やや東寄りに位置し、4号住居と切りあう。4号住居との切りあい関係は明確にすることは出来なかった。方形プランで、規模は東西4.2m、南北3.3m以上、検出面から床面までの深さ約27cmを測る。

住居址の中央部付近からは、長径10~20cmの軽石数個がまとまりをもって検出された。また、住居址床面から、165×90cm、深さ約20cmの長方形の土坑、最大幅75cm、深さ約10cmの溝状の落ち込みが検出された。これらが住居址内の一施設か、別の遺構との切りあいかは、即断はできない。なお、これらの遺構から出土した土器は住居址のものと同時期である。

住居址内からは、おびただしい量の土器がびっしりと厚く堆積した状態で出土した。土器は東側、中央から南西部、北西隅において、特に集中度が高い。土器は床面より、やや浮いた位置から約15~20cmの厚さで堆積する。床面出土のものは少ないが、浅い溝状、土坑状の落ち込み内では底面より土器が出土している。

住居址内からは土師器の壺、単口縁壺、二重口縁壺、小型丸底壺、高壺、鉢、ミニチュア土器、鉄鎌、軽石製品が出土した。

出土遺物（第14~17図）

43~54は壺である。

43~45は胴が丸く張り、頸部で強く屈曲し、口縁部は外傾する。口縁端部は43が水平に、44、45が外に面を作る。45は端部平坦面に浅い沈線を巡らしている。器面調整は、いずれも口縁部外面がヨコナデ、胴部外面は刷毛目調整で、肩部ではナデ消している。内面調整は43、44が頸部まで刷毛目を施している。45は不明。53は口縁部で形態は45に酷似する。

46~48は胴が丸く張り、外傾する口縁部の先端部が緩く外反するものである。いずれも口縁端部は丸くおさめる。46は頸部の屈曲が強く、口縁部が肥厚する。47は口縁部が立ち上り気味で、48は口縁部の外反が弱い。器面調整は46、47が外面ナデ調整で、内面にはケズリを施し、48は外面ナデ調整で、内面は風化の為、不明である。

49、50は最大径を胴部中位にもち、長胴気味のものである。50は丸底を呈している。49は口縁部が短く外傾し、端部は丸くおさめる。いずれも、外面は刷毛目調整で、肩部はナデ消し、49は口縁部をヨコナデで仕上げる。内面は49がケズリを施し、50はナデ調整で、部分的に指オサエ痕がみられる。49の口径12.6cm。

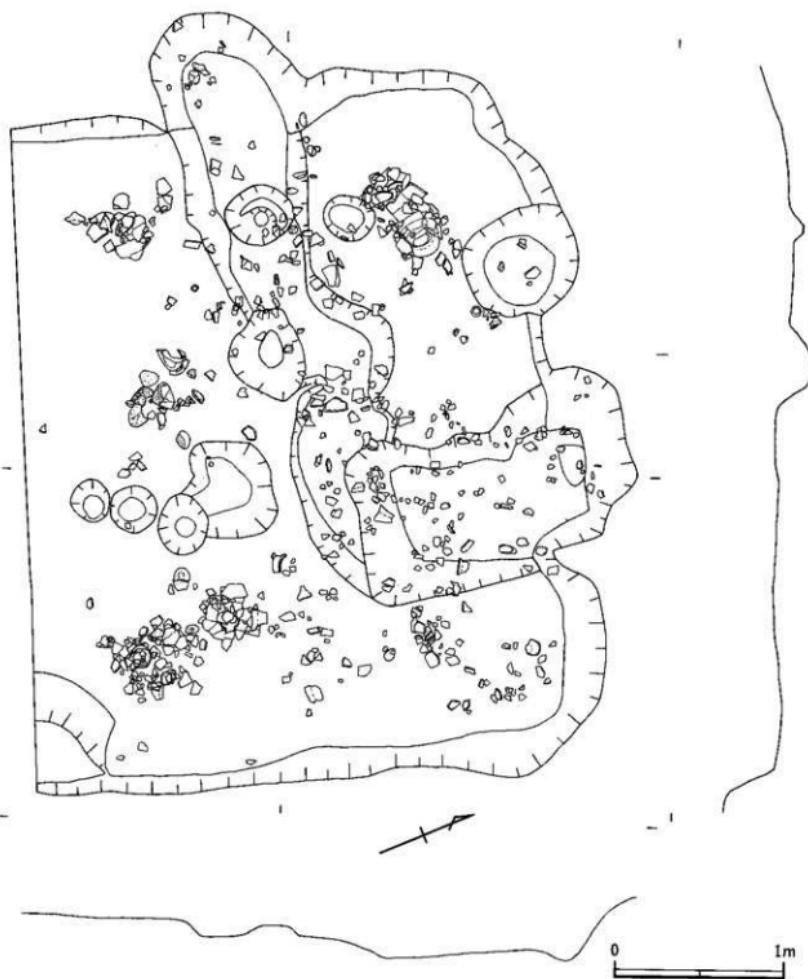
51は壺の底部で丸底を呈する。内外面ともにナデ調整である。

52は小型の壺であり、張りのない胴部から口縁部が短く外傾する。口縁部の径が胴部径を上まわる。外面が刷毛目調整、内面はナデ調整である。

54は吉備系の壺と思われ、外傾する受部から、口縁部が短く直立する。口縁端部は丸みをもった面を作り、外面に強いヨコナデを施す。胎土にごく少量の砂粒を含み、焼成は良好である。

55~59は壺である。

55~57は大型の単口縁壺で、肩が張り、口縁部は直線的に外傾する。55、56は口縁端部に面



第13図 3号住居遺物出土状況図

を作り、57は丸くおさめる。55はほぼ完形に復元でき、口径18.5cm、器高33.4cmを測る。やや長胴で、56、57に比べ、口縁部の外傾度はきつい。外面の調整は、いずれも口縁部がヨコナデ、胴部が刷毛目調整で、肩部はナデ消す。57は口縁部の一部に刷毛目を残す。内面調整は、55が胴部に、57が口縁部に刷毛目を施し、56はナデ調整である。57の口径14.5cm。

58は中型の壺で、胴部は丸く、最大径を胴部中位にもつ。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめる。調整は口縁部外面にヨコナデを施し、胴部内外面は刷毛目調整である。推定口径10.6cm。

59は二重口縁の壺である。胴は丸く張り、頸部は縮まる。口縁部は外傾する口縁受部から、段をもって二重口縁部が直立気味に外傾し、端部は丸くおさめる。口径16.2cm。口縁部外面は段を境に緩杉状に刷毛目を施し、口縁端から約1.5cm下まではヨコナデで消す。また、二重口縁部には波状の線刻がみられる。胴部外面は刷毛目調整で、頸部下約1cmはナデ消す。内面は口縁部、胴部ともに刷毛目調整である。山陰系の壺か。

60は胴部～底部片で、外面に波状の線刻がある。外面の調整はケズリ後、ナデである。

61～63は小型丸底壺である。

61、62は胴部が扁球形を呈し、口縁部は長く直線的に外傾する。口縁端部は丸くおさめる。61の方が、より胴部の扁球度は強く、口縁部がわずかに内彎している。61は黄褐色を呈し、外面調整はヨコナデで、胴の最も張った部分にヘラミガキを施している。内面はナデ調整である。62は口縁部外面に刷毛目を施し、口縁直下及び、頸部はヨコナデで仕上げる。内面はナデ調整である。61、62ともに完形品で、61は口径9.8cm、器高7.3cm。62は口径11.2cm、器高7.8cm。口縁部と胴部の高さの比は61が1:1.03、62が1:1.23である。口径と胴部最大径の比は61が1:0.80、62が1:0.73である。

63は底部が平底に近い丸底で、胴部の張りは小さく、口縁部は外傾し、端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。器高5.2cm。

64～72は高坏である。

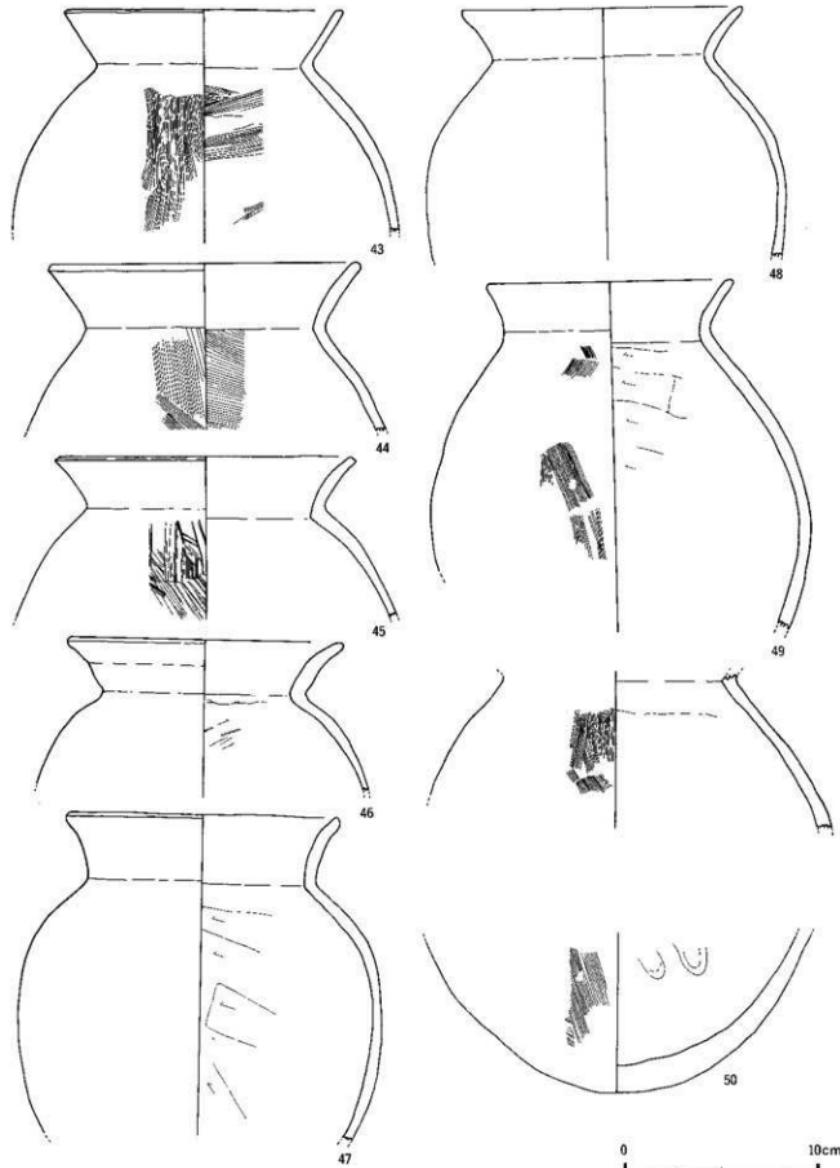
64は坏部である。下方に稜をもち、口縁部は外上方に直線的に伸びる。口縁端部はやや尖らせ気味に整形し、調整は内外面ともに刷毛目調整である。

65～72は脚部で、下方に向って直線的に開く脚柱部から屈曲して、裾部が大きく広がる。裾端部は65が尖らせ気味に整形し、66が丸くおさめ、67が面を作る。70は脚柱部からの屈曲が弱く、裾部へスムーズに移行する。脚柱部の形状は、65、66、68～70は開きが大きく、特に65、69はその傾向が著しい。それに対して67、71、72は開きが小さく、直立に近い状態である。また、71は脚柱部が細くて、短い。

外面調整は72がヘラミガキ、65、68が刷毛目を施す。内面は65、72が脚柱部にケズリを施し、66は裾部に刷毛目を残す。その他はナデ調整もしくは調整不明である。

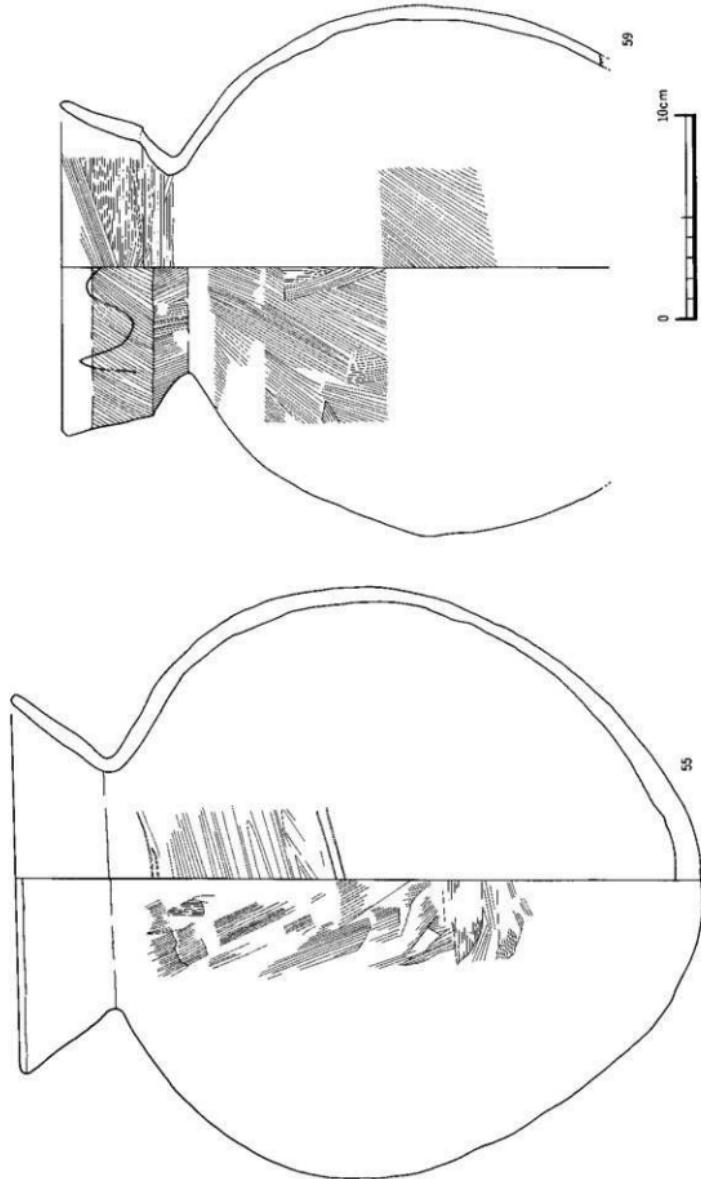
73～75は鉢である。

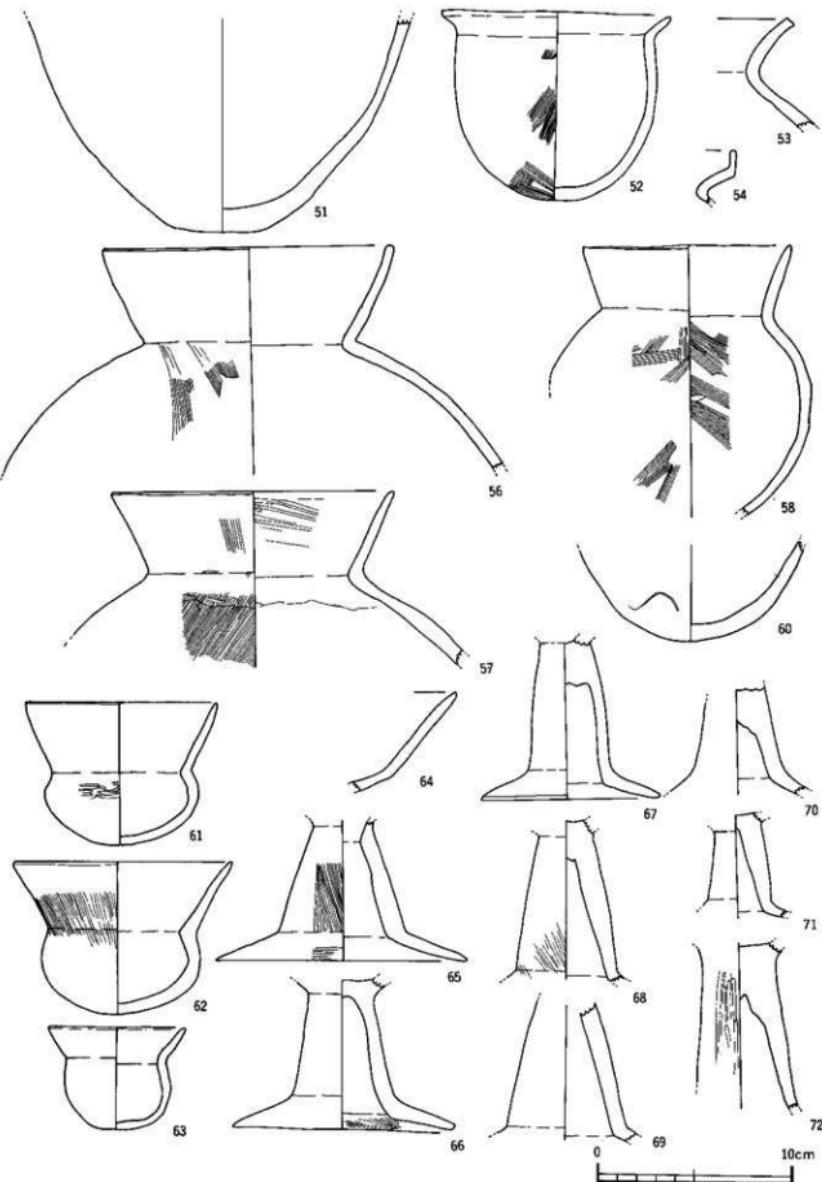
73は平底の鉢である。体部は内彎しながら立ち上がり、端部は尖る。器高より口径が大きい。調整は外面が刷毛目後、丁寧なナデ。内面はナデである。74は脚台付きの鉢である。体部が直線的に立ち上がり、端部はナデで面を作る。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整である。75は



第14図 3号住居出土遺物実測図 1

第15圖 3号住居出土遺物実測図 2





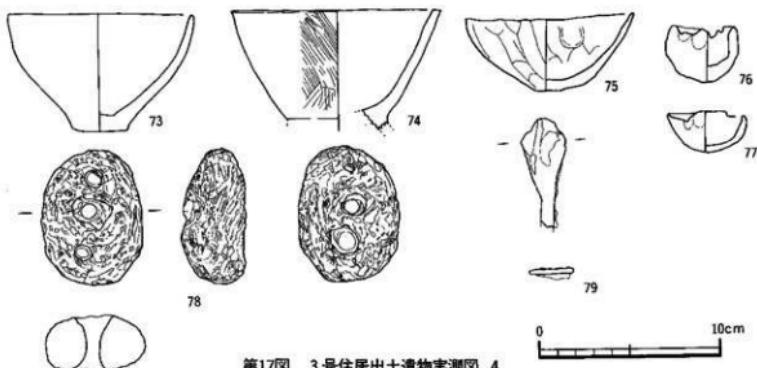
第16図 3号住居出土遺物実測図 3

体部が内彎しながら立ち上がる半球状の鉢である。内外面全体が指オサエにより整形されており、器壁は薄い。口径9.2cm、器高4.4cm。

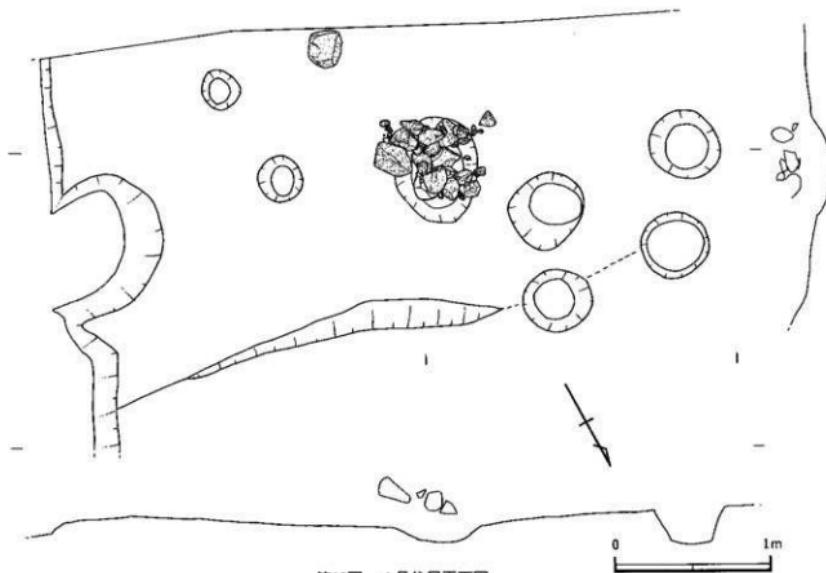
76、77はミニチュア土器で、ともに手捏ねで、鉢形を呈し、体部は内彎しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面に指オサエ痕を顕著に残す。76の口径3.65cm。77の口径4.3cm。

78は穿孔を施した怪石である。梢円形を呈し、最大長7.5cm、最大厚3.5cm、重量24.72g。怪石のほぼ中央に穿孔を施し、穿孔部の上下にも浅い窪みが認められる。

79は鉄鎌である。主頭鎌で、現存長6.0cm、幅2.5cm、重量9.39gを計測する。



第17図 3号住居出土遺物実測図 4



第18図 4号住居平面図

4号竪穴住居（第12、18図）

東側は3号住居と切りあい、住居址の大部分は調査区外にかかる。床面で確認したため、住居址の規模、プランは不明である。住居址東側でピットが検出された。

住居址内からは軽石による石組が検出された。石組は10~30cm大の軽石により構成されており、大型の軽石の中にはカット面の見られるものも存在する。また、一部の軽石は部分的に赤変している。軽石組の下からは長径67cm、短径54cm、深さ約10cmを測る楕円形の土坑が検出された。また、土師器甕(82)が軽石組の北端で床に埋まった状態で検出された。

住居址からは土師器の甕、高坏、二重口縁壺、鉢が、やや床面より浮いた位置で出土した。

出土遺物（第19図）

80~82は甕である。

80は胴が丸く張り、頸部は締まる。口縁部はわずかに内彎しつつ外傾し、端部は内側をつまみ、外側に面を作る。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目調整で、頸部から肩部にかけてはナデ消す。内面はケズリを施す。胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。

81、82は胴が丸く張り、最大径を胴部中位にもつもので、頸部の屈曲は弱く、内面の稜は不明瞭である。81は口縁端を丸くおさめ、丸底で、82は口縁端は尖り気味で、平底を呈する。調整はともに内外面ナデである。81は推定口径17.3cm、器高19.1cm、82は器高17.5cmを測る。

83~85は高坏である。

83は坏部で、坏底部付近に稜をもち、口縁部は外傾し、端部は丸くおさめる。調整は内外面とともにヘラ磨きを施す。口径に比して、やや体部が深い。口径11.4cm。

84、85は脚部で、84は脚柱部が下方に向かって直線的に開き、屈曲して、裾部が広がる。裾端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。85は脚柱部で外面にヘラ磨きを施す。

86は二重口縁壺の口縁部片である。二重口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面ともに調整は磨き。87は鉢の口縁部片である。

5号竪穴住居（第20図）

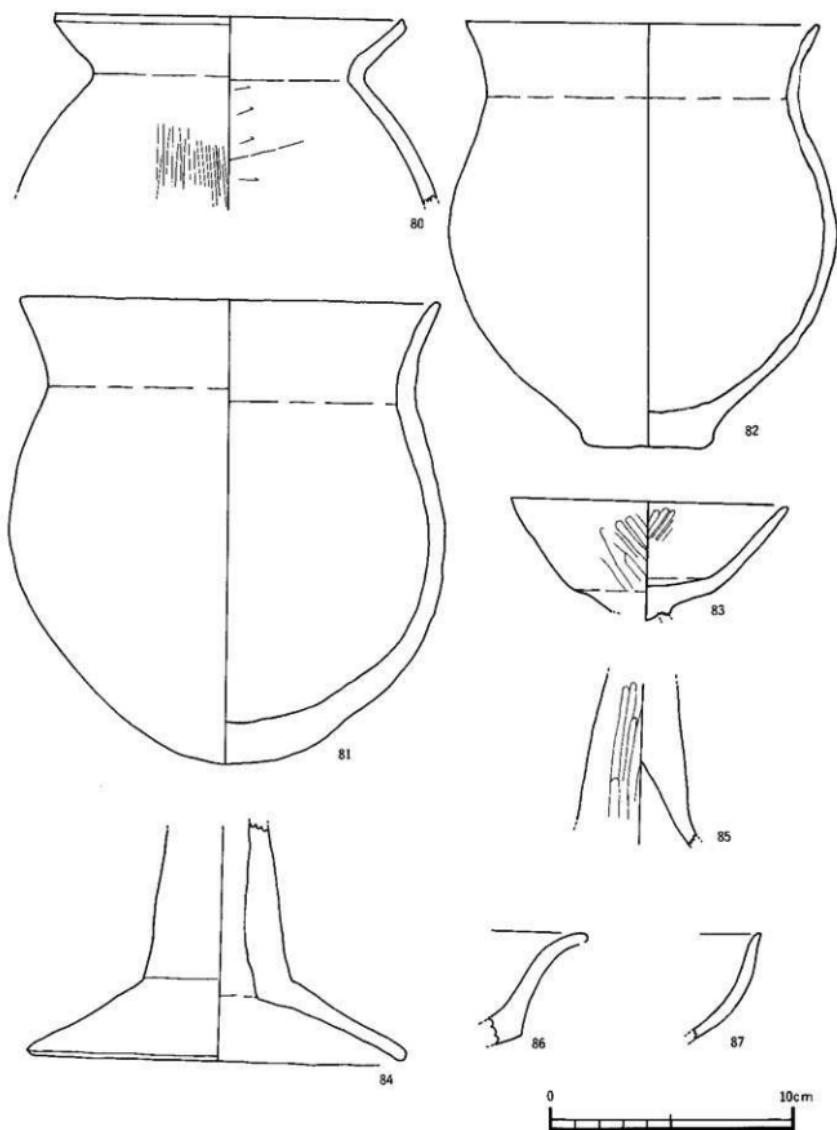
B区の東南隅、3号住居の東側に位置する。住居址の東側から南側にかけては調査区外にかかり、住居址を南北に水道管が継続し、完掘することは出来なかった。住居址の規模は東西3.4m以上、南北3.95m以上、検出面から床面までの深さ約20cmを測り、方形プランである。

住居址の大部分が搅乱しており、出土遺物も少なかった。

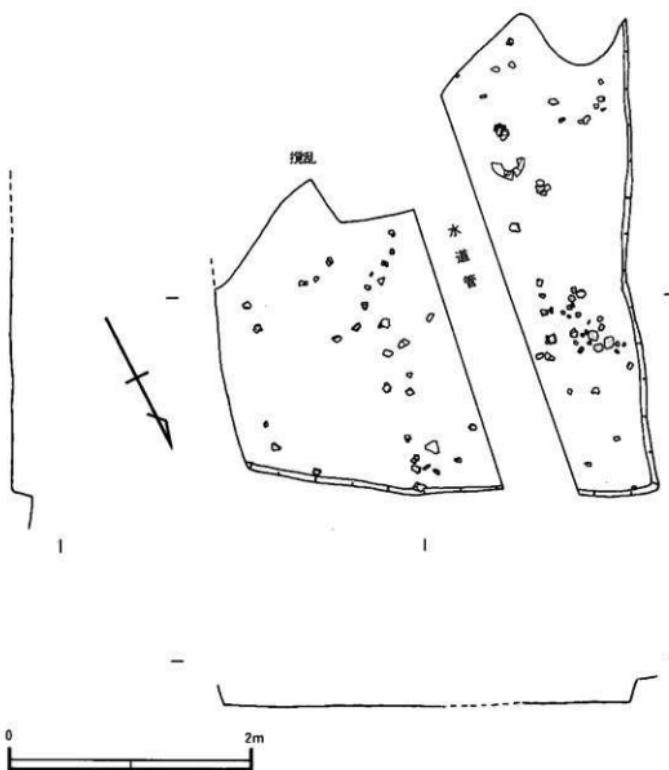
出土遺物（第21図）

88は高坏の口縁部で、外上方に直線的に伸び、端部は外に面を作る。内外面ともにヘラ磨きがなされている。推定口径22cm。

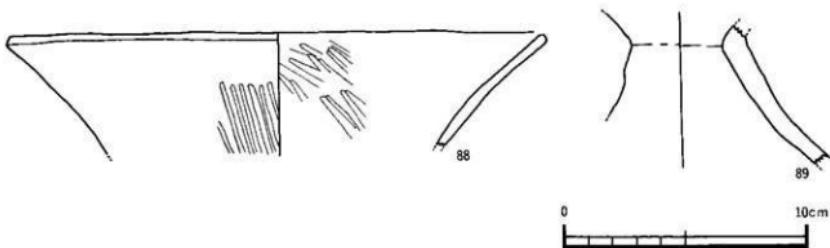
89は器台である。器受部と裾部が直接接合するもので、裾部は下方に向って、わずかに外反しながら開く。調整は内外面ともに風化、煤の付着の為、不明である。



第19図 4号住居出土遺物実測図



第20図 5号住居遺物出土状況図



第21図 5号住居出土遺物実測図

6号竪穴住居（第22図）

5号住居の北に位置する。東側は調査区外にかかり、南側は溝状遺構1が切っている。また、5号住居と同じく、住居址内を南北に水道管が縦断する。住居址の北側は壁を検出することが出来なかったが、北西部のコーナーから方形のプランが想定できる。規模は東西4.1m以上、南北1.85m以上を測る。柱穴は確認できなかった。

住居址からは土師器の壺、壺、高坏、鉢、磨石が出土し、遺物の大半は床面より、浮いた位置で出土した。住居址南側には壺(90)が床面に埋まった状態で検出された。焼土等は確認されなかったが、埋壺と思われる。

出土遺物（第23図）

90、91は壺である。

90は長胴で、頸部の屈曲は弱く、内面の稜は不明瞭である。口縁部は、やや立ち気味に外傾し、口縁端部は丸くおさめる。内外面全面に刷毛目を施し、口縁部外面はヨコナデで仕上げている。91は口縁部の形態は90に近いが、90に比べ、胴が張り、頸部内面の稜は、やや明瞭である。内外面ともにナデ調整である。

92は壺で、胴が丸く張り、口縁部はやや立ち気味で、直線的に外傾する。口縁端部は尖らせ気味に整形している。胴部外面に刷毛目を施す。

93は脚台付きの壺で、口縁部に最大径をもつ。胴部の張りは小さく、頸部の屈曲も緩やかで、口縁部は立ち上がり気味に外傾し、端部は面を作る。脚台部は「ハ」の字状に開き、端部は丸くおさめる。外面はナデ調整、口縁部内面には刷毛目を施し、頸部以下はヘラミガキしてある。完形品で口径12.3cm、器高11.2cmを測る。

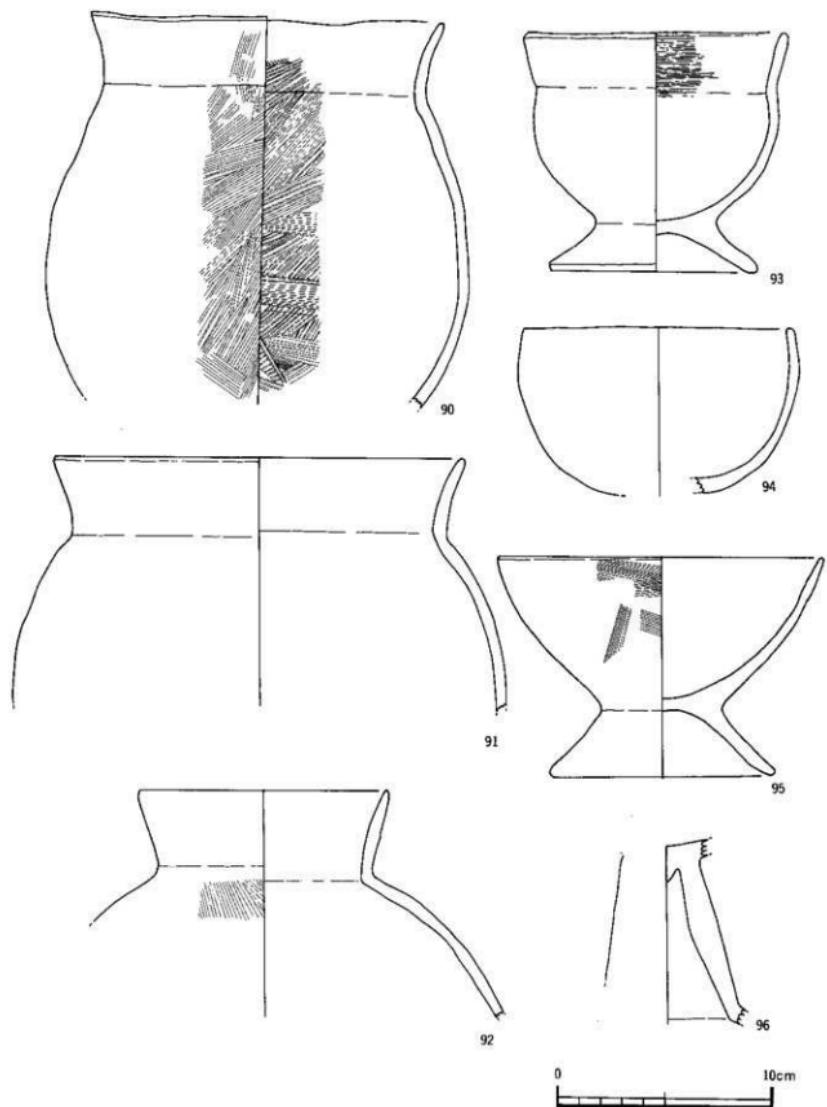
94、95は鉢である。

94は半球状の鉢で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともにナデである。95は脚台付きの鉢である。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。脚台部は「ハ」の字に開き、端部は丸い。外面は刷毛目調整、内面にはヘラミガキを施す。器高10.4cm、推定口径15.3cm。

96は高坏の脚部で、脚柱部が外下方にむけて、直線的に開き、屈曲して、裾部へと続く。内外面ともにナデ調整である。



第22圖 6號住居遺物出土狀況圖

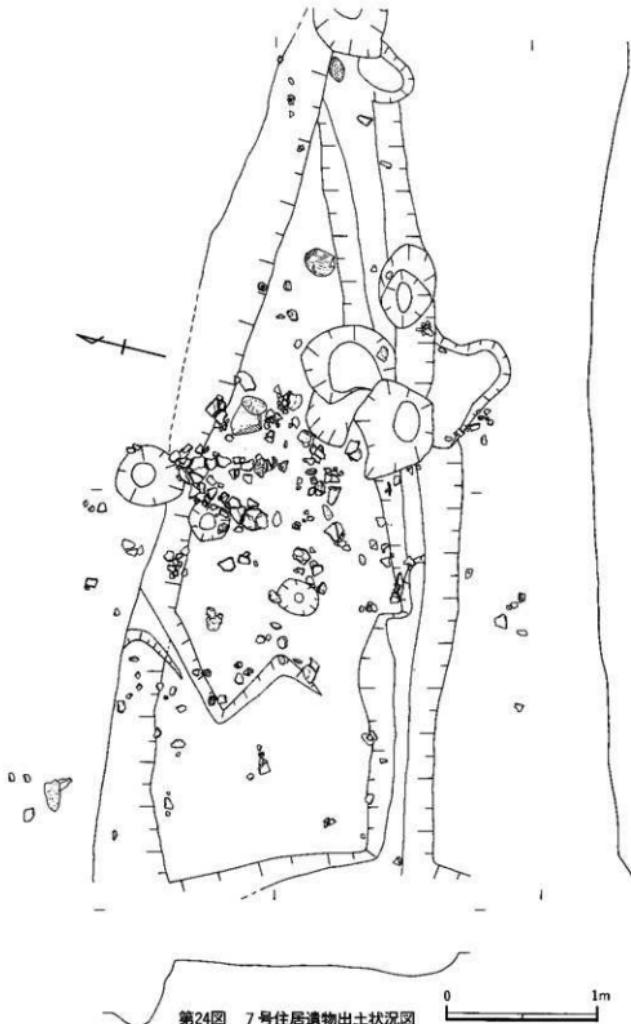


第23図 6号住居出土遺物実測図

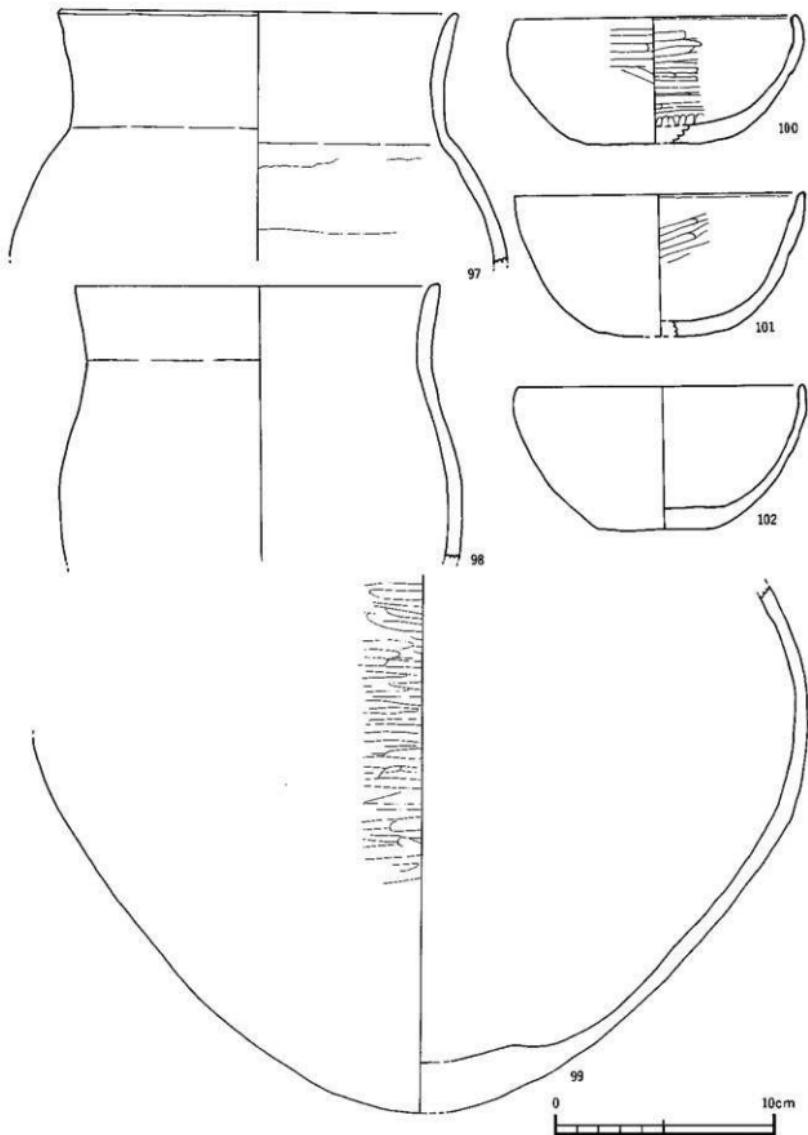
7号竪穴住居（第24図）

住居址の北側から北東側にかけて溝状遺構1に、南側を溝状遺構2に切られ、西側では8号住居址と切りあっており、規模、プランは確定できない。

住居址内出土の遺物は土師器の甕、壺、高坏、鉢で、大型の軽石も検出された。遺物の大半は床面上より出土した。



第24図 7号住居遺物出土状況図



第25図 7号住居出土遺物実測図

出土遺物（第25図）

97、98は壺である。

97は胴部から、口縁部が上方に長く立ち上がり、頸部内面の稜は不明瞭で、口縁端部は面を作る。98は胴の張りが弱く、頸部内面に稜は認められない。口縁部はほぼ直立し、口縁端部内側を強くナデて、端部は尖らせ気味に整形している。97、98ともに内外面ナデ調整で、97は口縁部外面にヨコナデを施し、98は口縁端から1.2cm幅内のヨコナデを施す。

99は大型の壺の胴下部で、底部は丸底を呈する。外面にはヘラミガキがなされており、内面はナデ調整である。

100～102は鉢である。

100は推定口径12.8cm、器高5.8cm。丸みをもった平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部付近で、内傾する。口縁端部は丸くおさめる。101はやや平らな丸底で、体部が内彎しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。推定口径13.2cmを測り、100に比べ、体部が深い。調整は100、101とともに、内面ヘラミガキで、100は外面にもヘラミガキを施す。102は平らな底部から、体部が内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。器高6.5cm。

8号竪穴住居（第26図）

東側を7号住居、北側～西側にかけては溝状造構1に切られ、南側は調査区外にかかる。住居址西側では、床面が一段下がっており、更にその西側では粘土塊が検出された。別の造構との切りあいが考えられる。住居址の規模は東西3.6m以上、検出面から床面までの深さ約13cmを測る。柱穴は未確認である。

住居址内からは床面より、やや浮いた位置で、土師器の壺、鉢、ミニチュア土器が出土した。

出土遺物（第27図）

103～105は壺である。

103は口径が胴部径を上回るもので、平底を呈し、胴が丸く張る。頸部は屈曲して、やや長めの口縁部が外傾する。頸部内面の稜は明瞭で、端部には面を作っている。外面は口縁部がヨコナデで、頸部以下に刷毛目を施す。内面も刷毛目調整である。推定口径20.8cm、器高22.9cm。

104は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部付近で、わずかに外反する。ほとんど頸部が締まらず、口縁部と胴部との境は不明瞭である。調整は内外面ともにナデ。口径17cm。

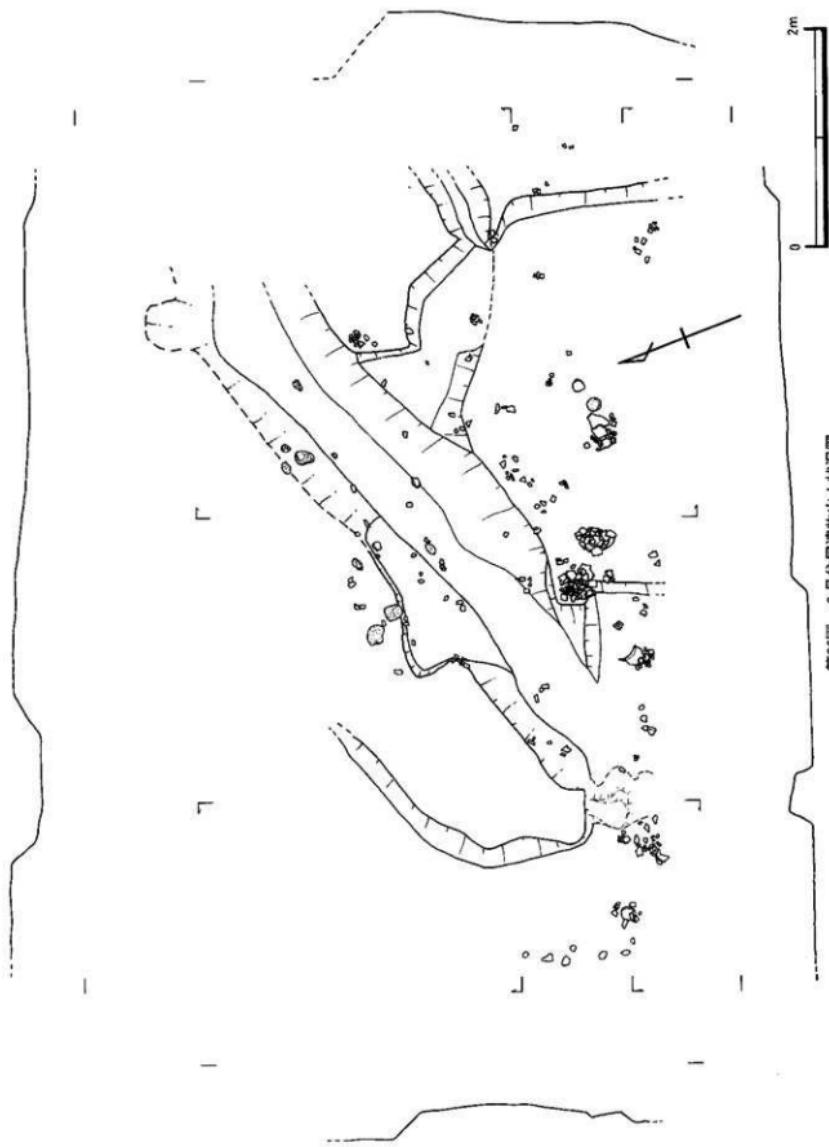
105は底部で丸底を呈す。外面は刷毛目調整である。

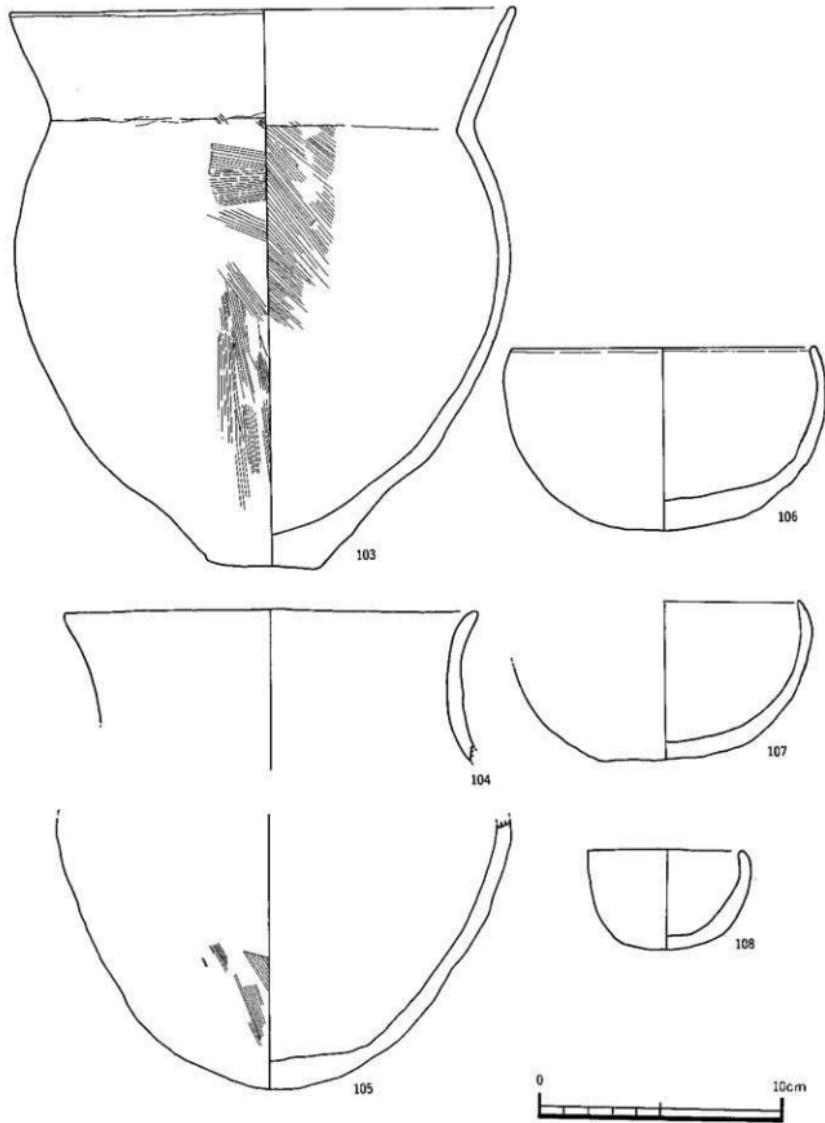
106、107は鉢である。

ともに体部が内彎しながら、立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部は106が丸いのに対し、107は丸みをもった半底である。ともに内外面ナデ調整である。106は完形品で口径12.7cm、器高7.5cmを測る。107は器高6.5cm。

108はミニチュアの鉢である。完形品で口径6.4cm、器高4.1cmを測る。体部の形状は、ほぼ106、107と一致し、底はわずかに丸味をおびる。調整は内外面ともにナデである。

第26図 8号住居遺物出土状況図





第27図 8号住居出土遺物実測図

9号竪穴住居（第28図）

調査区北側に位置し、南側は溝状遺構1に切られ、住居址中央部から南西方向に向けて溝状遺構3が横断する。住居址内からは14個のピットが確認された。主柱穴を4本とする住居が想定される。住居址は方形プランで規模は東西6.35m、南北5.7m以上、検出面から床面までの深さ約19cmを測る。

遺物は土師器の甕、壺、小型丸底壺、高坏、鉢、軽石製品が出土しており、住居址中央やや西寄りと北側あたりに集中してみられる。遺物の大半は床面から浮いた状態で出土している。

住居址西側の上面からは、まとまった量の土器が出土しており、別の住居が切りあっていた可能性がある。

出土遺物（第29、30図）

109～113は甕である。

109、110は胴の張りが弱く、頸部があまり締まらず、口縁部が立ち気味に外傾するものである。口縁端部は109が丸くおさめ、110は面をもつ。ともに内外面ナデ調整である。109の口径は推定で22.2cmを測る。

111は胴が丸く張り、短く外傾する口縁部をもつものである。口縁端部は外に面を作る。口縁部外面にヨコナデ、内面は刷毛目調整後、ナデで仕上げている。外面の調整は不明である。

112はやや尖り気味の丸底で、113は平底の底部である。ともに内外面ナデ調整である。112は壺の底部の可能性もある。

114は二重口縁壺である。頸部に刻目突帯を巡らし、口縁受部が外傾し、二重口縁部が外反気味に外傾する。口縁端部には面を作っている。内外面ともにナデ調整である。

115～123は高坏である。

115はほぼ完形品で口径19.2cm、器高16cmを測る。坏部は坏底部付近に稜をもち、口縁部は外上方へ伸び、端部は丸くおさめる。脚部は中空で、下方に向かって、やや膨らみをもって開き、屈曲して裾部が広がる。116は脚裾部以外は完存する。口径18.4cm。坏部は115とはほぼ同じ形態で、脚部は中空で、下方に向かって直線的に開く。115、116ともに内外面ナデ調整で、坏部と脚部の接合は円盤充填法でおこなう。

117、118は坏部で、117は115、116の坏部とほぼ同じ形態である。118は口径、坏部の深さとともに他のものを圧倒し、異質である。坏底部付近の稜は他のものに比べて、やや弱く、口縁部の立ち上がりもきつい。また、稜線上に指オサエ痕を残す。117、118ともに内外面ナデ調整である。

119～123は脚部で、119～122は脚柱部が下方に向かって直線的に開き、屈曲して裾部へ続く。121、122は脚柱部が短い。120は外面にヘラミガキを施し、121は裾部内面に刷毛目後、ナデ調整。123は円筒状の脚柱部をもつもので、中実のものである。外面にヘラミガキを施す。

124は鉢の脚台部で、脚台の裾は大きく広がり、ごくわずかに上げ底となる。

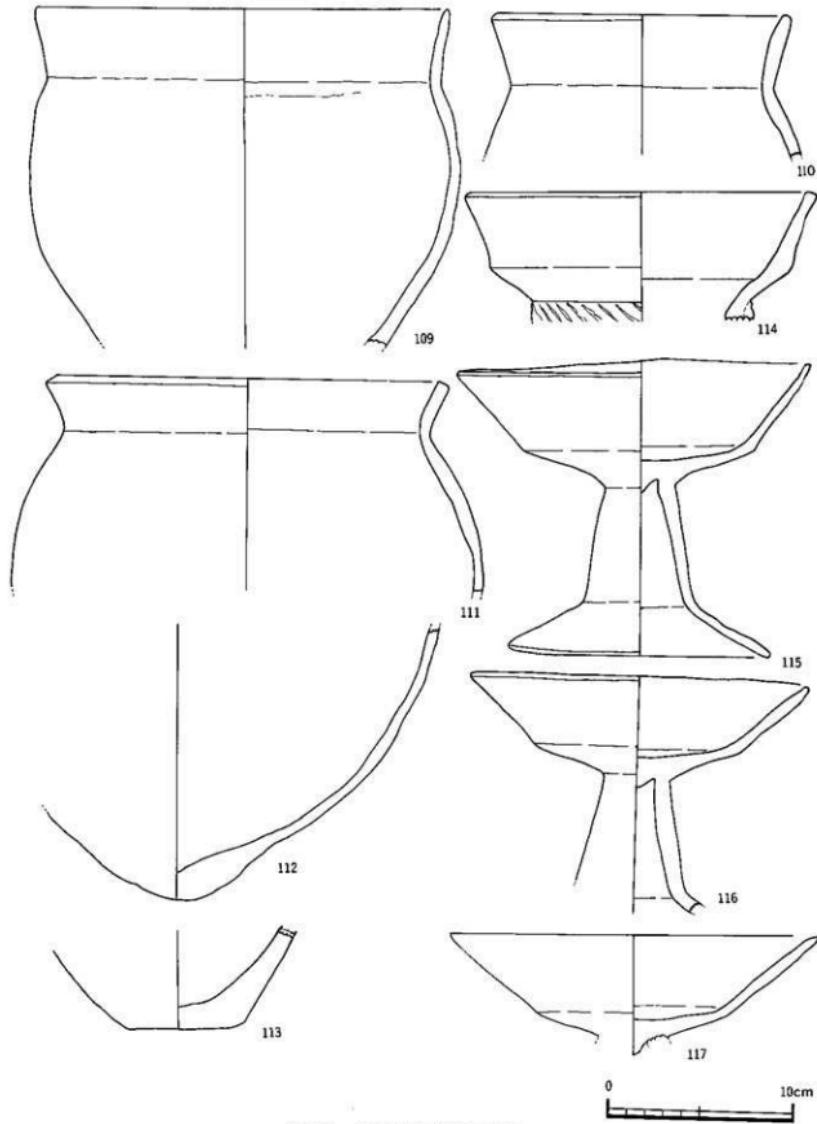
125は砥石である。断面長方形で延べ棒状を呈す。表面及び側面2面の計3面に使用の痕跡

が認められる。砂岩製で長さ21.5cm、幅5.6cm、厚さ3.5cm、重量485gである。

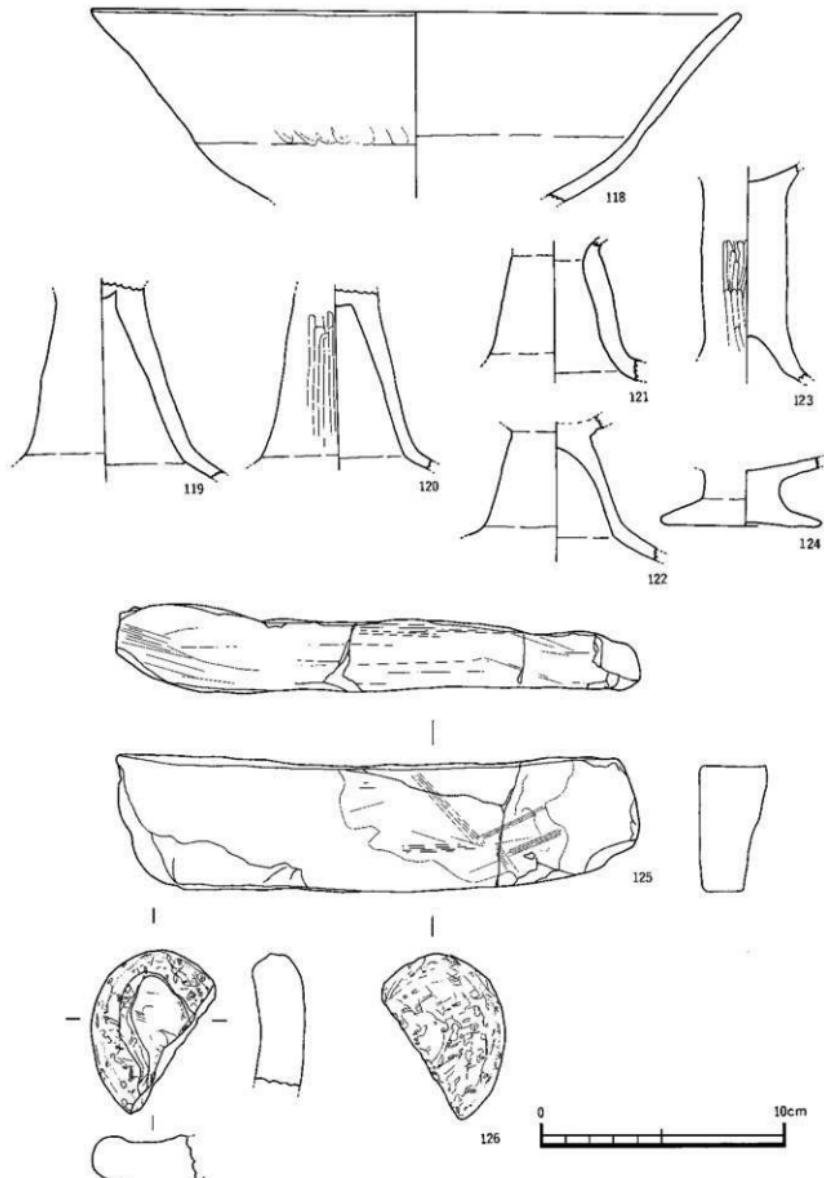
126は軽石製品で、片面の中央部を浅く窪ませている。平面形はおそらく、橢円形を呈するものであったと思われる。窪み部は縁から4.5mm下がる。



第28図 9号住居遺物出土状況図



第29図 9号住居出土遺物実測図 1



第30図 9号住居出土遺物実測図 2

10号竪穴住居（第31図）

9号住居の西側に位置し、南側を溝状遺構1に切られ、西側は深い擾乱の為に、破壊されている。規模は東西2.0m以上、南北2.6m以上で、検出面から床面までの深さ約18cmを測る。プランは方形で、コーナーは隅丸となる。柱穴等は検出することができなかった。

遺物のほとんどは床面より浮いた状態で出土した。遺物量は少なく、器種としては甕、高坏、鉢がみられる。

出土遺物（第32図）

127は鉢である。大型品で、体部は内彌氣味に立ち上がり、体部中位やや下から、口縁部にかけては直線的に伸びる。口縁端部は丸くおさめ、内面に刷毛目を施す。口径18.6cm、器高10.5cm。

128、129は高坏の脚部である。128は脚柱部が下方に向かって直線的に開き、屈曲して、裾部が広がる。調整は外面にヘラミガキを施し、内面はナデ調整である。129は脚柱部で、形状はほぼ128と同じである。

11号竪穴住居

9号住居のすぐ北側で検出され、住居址の大部分は調査区外にかかる。一部分のみの検出であり、疑問もあるが、ここでは一応、住居址の例に加えておく。プランは方形と思われる。

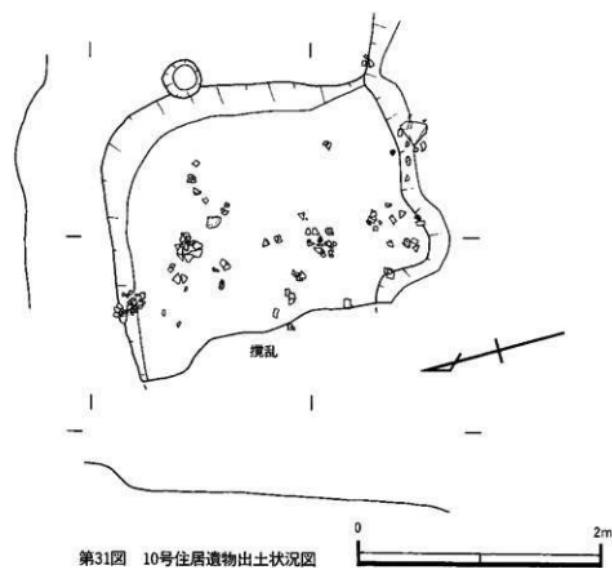
土師器の甕、壺、小型丸底壺、高坏、鉢が出土し、住居址の上面からも混在した状態ではあるが、まとまった量の遺物が出土している。

出土遺物（第33図）

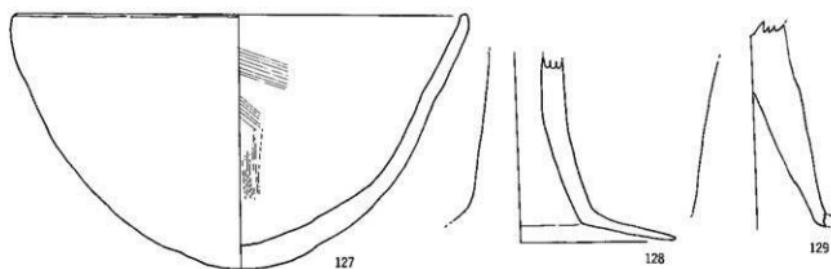
130は甕で、頸部が屈曲し、内面の稜もしっかりしている。口縁端部は強くナデて、外に面を作っている。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。口縁部外面にヨコナデを施す。

131は高坏で脚柱部はほぼ直立する。坏部外面に刷毛目、脚柱部外面にはヘラミガキを施している。

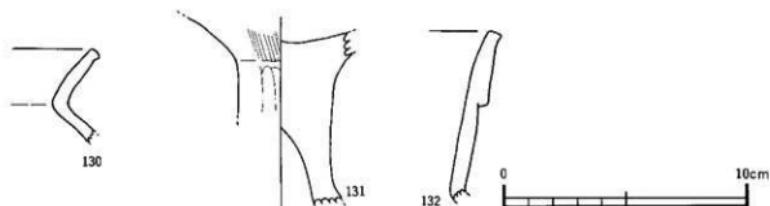
132は口縁部で、口縁端部を折り曲げて、幅2.9cmの帯状の隆起部を作りだしている。口縁端部はナデて平らに整形している。口縁端から約2cmの幅でヨコナデを施し、以下は刷毛目調整である。器形、時期ともにはっきりしないが、長く、ほぼ直立する口縁部をもつ壺であろうか。



第31図 10号住居遺物出土状況図



第32図 10号住居出土遺物実測図



第33図 11号住居出土遺物実測図

遺構出土の弥生終末～古墳時代遺物（第34図）

B区では多量の土師器が出土したが、そのなかには遺構に伴わないものも数多くみられた。特にB区西端及び、9号住居址東側においては、ある程度まとまりをもって出土した。

遺跡が砂丘上に立地する関係上、二次的なものと考えられるが、何らかの遺構に伴う可能性も否定できない。ここでは遺構に伴わない遺物のなかで、弥生終末～古墳時代に属するものについてのみ紹介する。

133は小型の壺で、丸底を呈し、胴下半部に最大径をもつ。頸部はやや太く、器高の1/3程度の口縁部高を有する。口縁部はやや外傾して、直線的に伸びており、端部は尖らせ気味に整形している。口縁部外面にヨコナデを施し、胴部外面は刷毛目調整後、ナデ。内面はナデ調整である。完形品で口径9.3cm、器高11.4cmを測る。

134は高杯の脚部である。脚柱部が太くて長い。

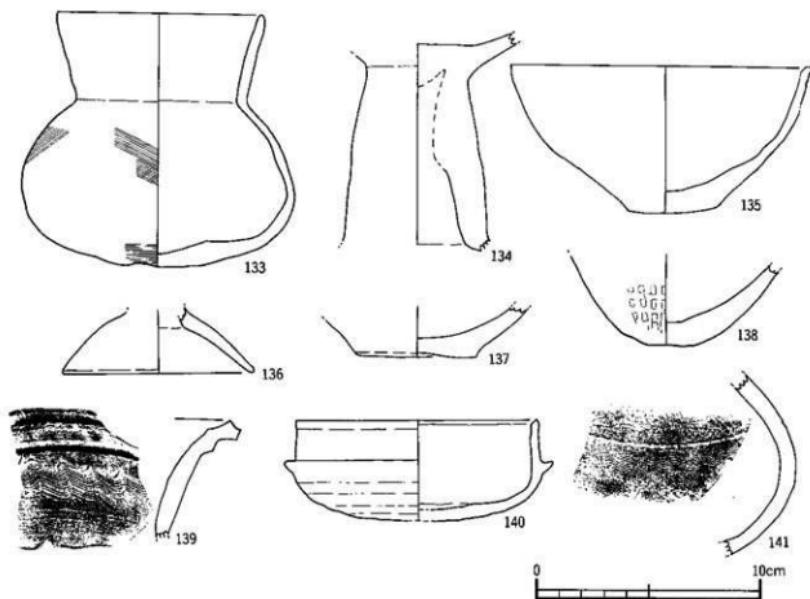
135は鉢である。平底で体部は内彎しながら、立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。口径13.5cm、器高6.6cm。

136は高杯の脚裾部もしくは、鉢の脚台部と思われる。内彎気味に外下方に広がり、端部は丸くおさめる。底径8.6cm。

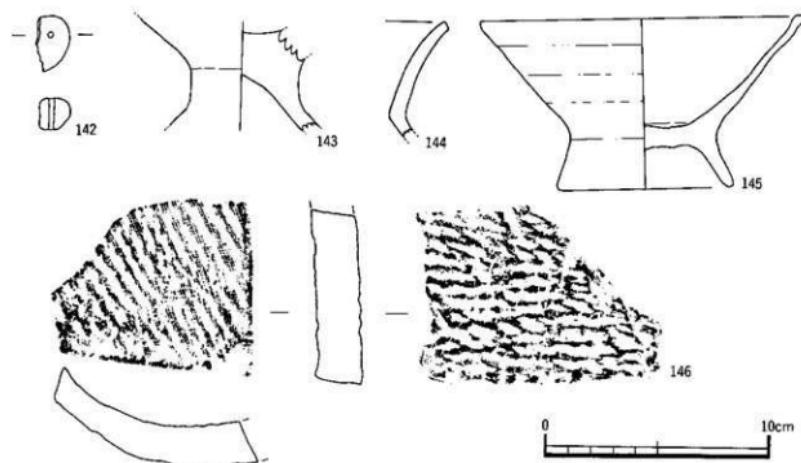
137は壺の底部で、平底である。調整は内外面ともにナデ。底径5.3cm。

138は壺もしくは壺の底部である。丸みをもった平底で、外面全面に格子目タタキを施す。胎土に2~10mmの大きな砂礫を多く含む。

139~141は須恵器である。139は壺の口縁部で、口縁部の稜はしっかりしている。外面に波状文を施す。140は壺身で、高く、ほぼ直立する立ち上がりをもち、口唇部には段を有する。141は甌と思われ、肩部に浅い沈線と波状文を巡らす。



第34図 遺構外出土の遺物実測図



第35図 溝状遺構1出土遺物実測図

第4節 その他の時代の遺構及び遺物

猿野遺跡からは古墳時代に属する住居址の他に、溝状遺構が3条検出された。

1. 遺構

溝状遺構1（第35図）

溝状遺構1はB区内をほぼ東西に横断し、6～10号住居を切っている。溝は幅70～120cm、深さ約30～40cmで、埋土は黒灰色砂である。

遺物のほとんどは土器の小片で、大半は底面より浮いて出土した。出土状況は混在した状態で、弥生土器、土製勾玉から、瓦、平安時代の土師質土器まで包含しており、かなりの時期幅が認められる。量的には古墳時代に属する土師器が多数を占める。築造時期については切りあり関係から住居址廃絶後に想定できるが、特定はできない。

142は上製勾玉で、下半分は欠損している。調査区西側の上面で出土した。黒色を呈し、頭部に穿孔を施している。

143は壺の脚台部と思われる。

144は土師器の壺か壺の口縁部である。口縁はやや外反し、端部は面を作る。

145は高台付きの壺である。体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。高台部は高さ2.25cmを測る足高なもので、端部は丸い。調整は内外面ともに回転ナデで、胎土は精良で赤橙色を呈し、焼成は良い。口径14.5cm、底径7.8cm、器高7.6cm。

146は平瓦である。5号住居址と切りあっている地点の上面で出土した。凸面に粗い横方向の繩目叩きを施し、凹面は布目痕がみられ、斜め方向の繩目叩きを施している。色調は浅黄色を呈し、胎土に1mm前後の砂粒を含み、焼成は良い。

溝状遺構2

幅約40～50cm、深さ約20cmで、7、8号住居を切っている。溝の底面のレベルは溝状遺構1よりも高い。遺物は土器の小片がわずかに出土したのみである。築造時期は特定できない。

溝状遺構3（第36図）

幅約70～80cm、深さ約15cmを測り、9号住居内から7号住居北東側で、溝状遺構1に合流する形で検出された。遺物は土師器が若干出土した。

147は高台付きの碗である。外下方に伸びる高台を有し、端部は丸くおさめる。外面の調整は回転ナデである。

148は壺で、須恵質の土師器である。底部は斜め下方に張り出し、ヘラ切り底である。

2. 遺物（第37図）

猿野遺跡出土遺物は古墳時代の土器類を中心とするが、その他に弥生土器、古代～中世の土器、土錘、軽石製品が出土した。ここではそれについて、簡単に解説する。

149～158は弥生土器である。

149、150は口縁が直口し、口縁部下に1条の刻目突帯を巡らす変形土器である。ともに口縁端部にも刻目を施す。149は外面が刷毛目調整である。

151、152は逆L字状の口縁をもち、胴部に断面三角形の突帯を巡らす変形土器である。151は大型品である。突帯の突出は鋭い。

153、154は壺の胴部で、断面三角形の突帯を巡らしている。154は突帯を2条付しており、内外面とともに刷毛目調整である。

155は小型の逆L字口縁をもつ変形土器で、外面に8mm幅で櫛描文を継ぎ位に施す。

156は壺の胴部で断面台形のしっかりした突帯を2条付している。

157は壺の頸部で突帯を付している。突帯に連続する「×」印で網の目状に刻んでいる。弥生終末期に属する土器と思われる。

158は壺の底部で、柱状の充実した脚台部をもち、外面にヘラミガキを施す。底径6.5cm。

159は壺の脚台部で、脚台は高い。「ハ」の字状に開き、端部付近でやや内彎する。端部はやうに整形している。底径8.4cm。他地域より搬入された土器か。

160～165は古代～中世の土器である。

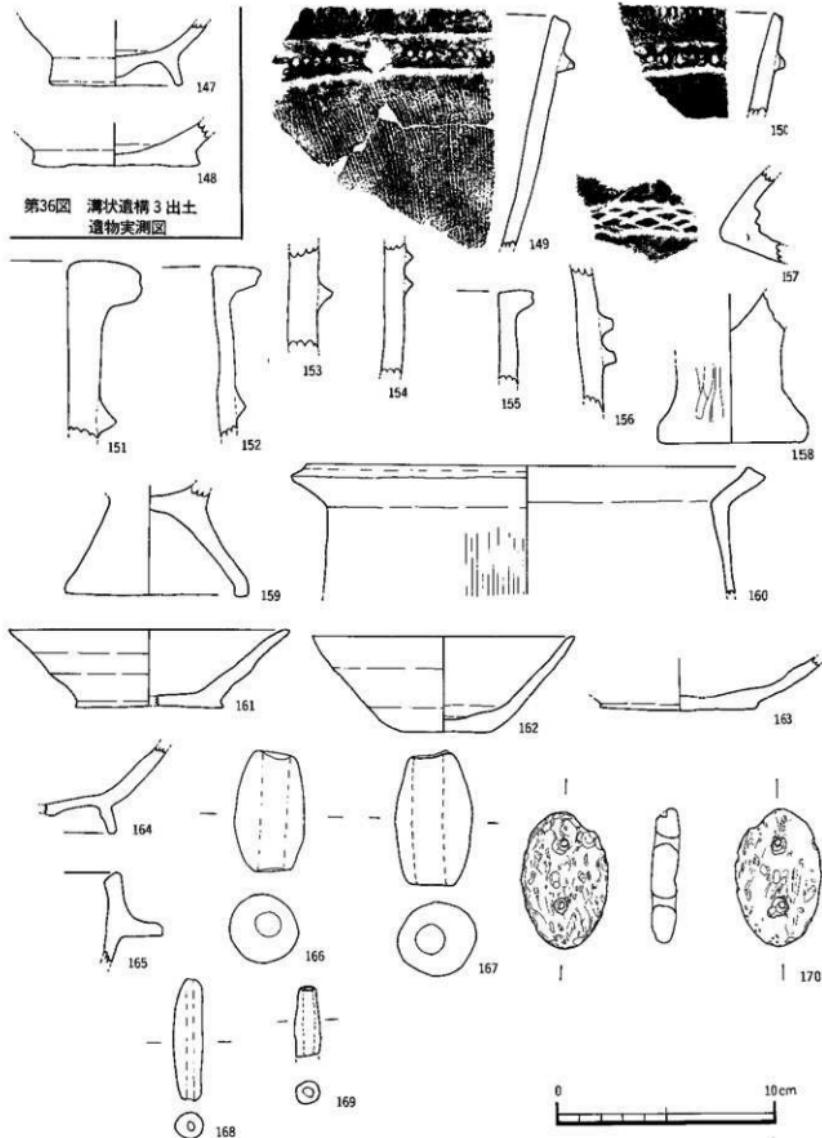
160は壺で胴部の張りはきわめて小さく、ほぼ直線的に頸部まで立ち上がる。口縁部は大きく外傾し、端部は外に面を作り、内側をつまんでいる。外面は刷毛目調整である。器壁は薄い。161～163は壺で、161は推定口径12.8cm、同底径6.7cm、器高3.5cmを測る。体部は外上方に直線的に伸び、口縁端部は尖る。底部は斜め下方に短く張り出す。162は推定口径12.0cm、同底径4.0cm、器高4.4cmを測る。体部は外上方に直線的に伸び、口縁端部は丸くおさめる。163は底径7.3cmを測る。161、162は回転ナデ調整で、底部はいずれもヘラ切りである。

164は高台付きの椀である。高台の高さは1.4cmで、端部は丸い。

165は瓦器の羽釜の口縁部である。口縁は丸みをもち、内側に面を作っている。黒灰色を呈している。

166～169は土鍤である。端部がやや細くなる円筒状を呈しており、太いもの、細いものがある。166は長さ5.5cm、重量41.54g、168は長さ5.6cm、重量7.61g。

170は軽石製品である。平面が梢円形で円盤状を呈し、2箇所に小さな穿孔を施す。表身具有あるいは浮子としての用途が考えられる。長径6.25cm、短径3.95cm、重量9.25gを測る。



第36図 溝状遺構3出土
遺物実測図

III 萩崎第2遺跡の調査

第1節 調査の概要と層序

萩崎第2遺跡は宮崎市波島1丁目、大島町萩崎に所在する。調査は道路敷設予定地内の畠地部分でおこなった。

調査前は良好な状態で包含層が残存しているとみられていたが、重機による表土剥ぎの段階で調査区のほぼ全域が削平をうけており、包含層下の黄灰色砂層まで達していることが判明した。また、調査区の西側においては、家屋建設によるものと推測される搅乱も見受けられた。調査はこの時点で、全面調査から、トレンチによる調査に切り替え、調査区内に7本のトレンチを設定した。

設定したトレンチは南北方向に1トレンチ(2×20m)、2トレンチ(2×8m)、3トレンチ(2×8m)、5トレンチ(4×8m)の4本。東西方向に4トレンチ(2×8m)、6トレンチ(2×3m)、7トレンチ(2×3m)の3本である。

このうち1～3、6、7トレンチは表土除去後、すぐに黄灰色砂層にあたった。4トレンチでは搅乱土層中から土器片が数点出土した。5トレンチでは上層は搅乱しており、現地表下約60cmあたりに、ごく薄く包含層である黒灰色砂層が残存しており、溝状遺構が検出された。また、溝状遺構の東側で変形土器が出土した。

萩崎第2遺跡の標準土層は第1層が灰褐色砂層で耕作土である。厚さ30～40cm。第2層は黒灰色砂層で5トレンチにおいてのみ薄く認められる。第3層は黄灰色砂層で、深くなるにつれて、白味を増し、海砂となる。遺物は第2層で出土した。

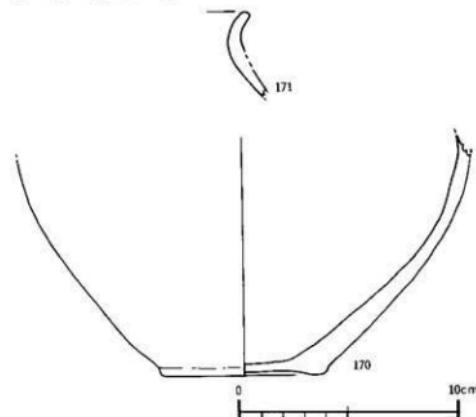
第2節 遺構及び遺物

1. 溝状遺構

5トレンチより溝状遺構が1条検出された。幅約50cm、深さ約20cmを測り、ほぼ南北方向に延びる。遺物が共伴しなかった為、時期は特定できない。

2. 遺物(第38図)

5トレンチより土器片が数十点出土したが、同一個体のものと思われる。170は変形土器の胴下半部である。底部は低いドーナツ形底で、底径7.5cmを測る。171は



第38図 萩崎第2遺跡出土遺物実測図

口縁部で口縁部が短く、外反する。端部は平らに整形している。調整は剥離、風化の為、不明である。胎土に2mm以下の砂粒を含み、色調は橙色を呈し、焼成は良好である。

IV まとめ

猿野遺跡の調査では、11軒の住居址と3条の溝状遺構が検出され、布留式併行期の土器が出士した。出土遺物のほとんどは住居址に伴うものであり、住居址の年代もほぼ同じ頃に比定できる。

また、猿野遺跡からは弥生時代中期前半の土器から、瓦、古代～中世の土師質土器、瓦器等バラエティに富んだ遺物が出土した。このことは、遺跡の立地する砂丘上が、弥生時代中期以降、長期間にわたって、生活の場であったことが想定出来る。特に布日瓦の出土は、付近に官衛遺跡等の存在も考えられ、興味深い。

萩崎第2遺跡の調査については、溝状遺構が1条と土師器甕1個体が出土したのみという結果に留まった。出土した甕は口縁部片より、7世紀前葉～中葉に比定される。^(注1)

萩崎第2遺跡の立地する第1砂丘列は第2砂丘列より高位であり、周辺にも遺物散布地は数多い。しかし、周辺には家屋が建ち並び、宅地化も進んでおり、重要遺跡の存在が想定される第1砂丘列南側における、実態解明は急務である。

以上が調査における両遺跡の位置づけであるが、おわりに猿野遺跡について、遺跡の周辺、集落、土器の3点に関するいくつかの問題点について、簡単に考察を加え、まとめとしたい。

[遺跡の周辺]

猿野遺跡は海岸線に近い、砂丘上に立地する。遺跡を挟んだ東西の低地では当然、水稻耕作がおこなわれていたことが推定される。特に西側の低地に関しては、その可能性が高い。

当時の大淀川の河口がどのあたりに位置していたかは明らかではないが、遺跡の付近に、河口もしくは入り江を利用した港の存在が考えられる。古墳時代当時の交通は船を利用した水上交通に主眼がおかれていたことは間違いなく、この地が畿内をはじめ諸地域との交流の窓口であったものと思われる。このことは、より港に近い位置であったと想定される第1砂丘根幹部に立地する橈遺跡、橈1号墳の存在が如実に物語っている。

特に橈1号墳は、1994年に宮崎大学教育学部考古学研究室の手により、墳丘測量が行なわれ、柳沢一男氏は、復元した墳形より、「前方後円墳集成」編年の1～2期にさかのばる可能性を指摘しておられる。^(注2) 全国的に、海ないしは古代の港と想定される地を望む位置に首長墓が築かれるといった事例は数多く存在しており、橈1号墳もその一例に加えられる。

遺跡の立地、搬入されたと思われる土器の存在等から、猿野遺跡が橈1号墳を築造した首長を支えた・集落であった可能性も指摘しておきたい。

[集落]

猿野遺跡の調査では、砂地であること、調査区が限られていたこと、遺構の切りあいがあること等、悪条件が重なり、遺跡の全容の解明というには、程遠い状況ではあったが、11軒の竪穴住居が検出された。住居址のなかで、全体が発掘できたものは9号住居のみであった。

住居址出土の一括遺物で、最も注意されるのは、その出土状況である。猿野遺跡検出の住居址の特徴に床面から浮いた土器が多いということが挙げられ、同じ住居址内出土の土器のなかに、同器種で複数の形式が認められ、混在した状況も見受けられる。

床面から、まとまりをもって土器が出土したのは2、7号住居のみで、他のものは床面より、やや浮いた位置もしくは、住居址埋土内のかなり高い位置での出土が大半を占める。このことは、ここが砂地であるために、自然作用による流れ込みの可能性も充分に考えられるが、住居廃棄後、住居址が埋まっていく段階での土器の投棄によるものと理解したい。

2、7号住居は住居廃絶時に土器も同時に廃棄していったものと思われる。このことは両住居における遺物の接合の結果からも指摘できる。また、2号住居においては、住居址上面でも遺物が出土しており、住居址埋没段階でも土器の投棄が行なわれたものと思われる。

1、3、4号住居においては床面出土のものは少ないが、床面より、やや浮いた状態で遺物が数多く出土している。特に3号住居においては遺物量および、出土状況から土器の大量投棄が、行なわれたものとみられる。これらの住居址は、住居廃絶時に土器も廃棄され、その後、比較的短期間のうちに、土器が投棄されたものではなかろうか。

6、8、9、10号住居は土器の出土レベルが床面より、かなり高く、一定期間を経た後の土器の投棄が考えられる。しかし、6号住居における甕（遺物No90）、10号住居における鉢（同127）等、床面で出土したものも少数であるが見受けられる。

以上のことから、住居址相互の時期比較について多くのことを語ることは危険であるが、出土土器より、ほぼ同時期に存在したものと推測される。そのなかで、7号住居床面より、頸部の縊まりが弱く、直口に近い口縁部をもつ甕が出土しており、他の住居より後出するものと思われる。同様の甕は、図示していないが、1、3号住居の埋土上層からも出土している。また、口径が体部径より広い小型丸底甕の出土から、3号住居にやや古い様相が伺える。

〔土器〕

猿野遺跡からは、古墳時代前期の布留式土器に併行する時期の土器が多数出土した。これらのうち、一部の変形土器、小型丸底甕、高坏、器台に布留式土器の特徴が認められる。

猿野遺跡出土の土器で最も注目されるのが、布留式の甕の存在である。実測図中の1、80は布留甕で、4、5、43、44、45の一群も、それに近い形態を示している。これらの土器は1、3、4号住居から出土している。

この布留式の甕は、こまかなく手法、調整、器壁の厚さにおいて、畿内、北部九州出土のものとは差異が認められるが、器形については近似しており、模倣されたものとみられる。問題はその模倣がオリジナルからのものか、他地域で変容したものが当地に搬入され、それを受容したものか、それが更にこの地で変化、省略化されたものか、幾通りもの解釈が可能だが、今後の出土例を待ちたい。

もう一つ問題となるのは、在地系の甕との関係である。猿野遺跡出土の変形土器の多くは球形胴甕で、(註3)これらは胴部の球形化といった外来的要素をもつが、口縁部の形態、調整手法

等に強い在地色が伺える。2、4、6～9号住居出土の壺がこれにあたり、特に2号住居においては4体の壺がほぼ完形に復元できたが、いずれも球形胴壺で、うち3個体が丸底、1個体が平底であった。また、7～9号住居では胴の張りが小さく、屈曲がきわめて弱い頸部に、ほぼ直口に近い形態の口縁部をもつ壺も認められる。

一方、1号住居においては布留式壺ないし、それに近い形態のものと、口縁部が上方に立ち上がる壺に近い形態のもの、3号住居では布留式壺に類似するものと、口縁部が緩く外反するもの、口縁部が短く立ち上がるものが共存する。また、4号住居においては布留式壺に、平底、丸底の球形胴壺が共存している。

以上のように、各住居址間で、出土した壺の構成に違いが認められる。この相違は集落内に移住者と在来者が共存していたととらえるよりも、むしろ連綿と続く、在地系壺の流れのなかで、布留式壺が断続的に波及し、それを受容した結果と思われる。また、その影響の大小、受容の仕方の差異により、短期間に内に数タイプの壺が共存するのではないかろうか。

猿野遺跡住居址出土の土器の多くが、一括資料として取り扱えない状況から、ここではその可能性を指摘しておくにとどめ、各土器間の位置づけ、及び細分については今後の課題したい。

猿野遺跡の調査においては、遺物整理の時間が充分にとれず、決して満足な報告ができたとは言い難い。今後の整理の段階で、新知見があれば、別の機会に報告したい。

最後になりましたが、宮崎大学教育学部助教授柳沢一男氏には、発掘現場及び遺物整理の段階において、懇切な御教示を頂いた。記して、感謝致します。

(注1) 野間重孝「浄土江遺跡における土師式土器の編年的試論」『宮崎考古』第7号 1981

(注2) 柳沢一男・有間義人「宮崎県の古墳資料(2)」『宮崎考古』第14号 1995

(注3) 吉本正典「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察—須恵器出現以前の資料を中心として」『宮崎考古』第14号 1995

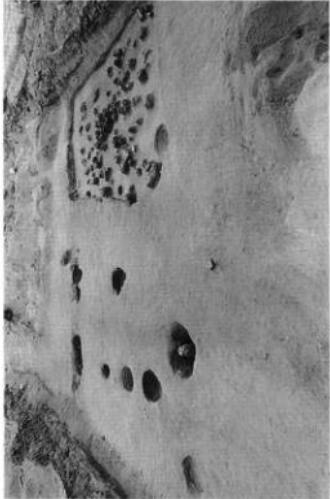
【参考文献】

石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991

寺沢薰編『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第49冊

奈良県立橿原考古学研究所 1986

宮崎県教育委員会「熊野原遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 1985



図版 1 桑野道路 A-1 区全貌 (西から)



図版 3 桑野道路 1号竖穴住居発出状況 (北から)



図版 2 桑野道路 B区全貌 (東から)



図版 4 桑野道路 2号竖穴住居発出状況 (東から)



図版7 猿野遺跡3号竪穴住居土器出土状況—上面（東から）



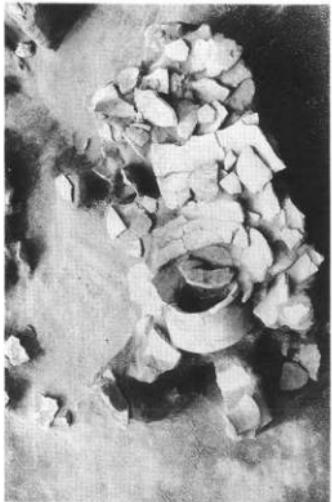
図版8 猿野遺跡3号竪穴住居土器出土状況—上面



図版5 猿野遺跡2号竪穴住居土器出土状況



図版6 猿野遺跡2号竪穴住居土器出土状況



図版 9 猿野遺跡 3号竖穴住居器出土状況—上面



図版 12 猿野遺跡 4号竖穴住居器出土状況（北から）



図版 9 猿野遺跡 3号竖穴住居器出土状況（西から）



図版 10 猿野遺跡 3号竖穴住居器出土状況（西から）



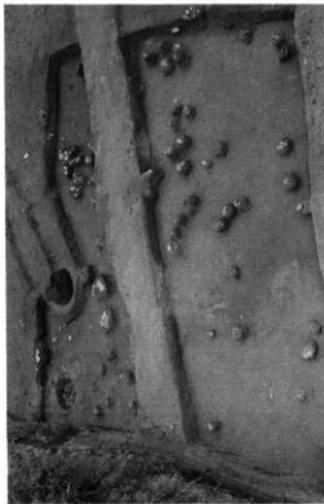
図版15 濑野道跡 6号竖穴住居土器出土状況



図版16 濑野道跡 7号竖穴住居、溝状溝渠 1棟出土状況（東から）



図版13 濑野道跡 4号竖穴住居壁石組換出状況



図版14 濑野道跡 5号竖穴住居換出状況（東から）